

余市水産博物館

BULLETIN OF
YOICHI FISHERIES MUSEUM

研究報告

第 18 号 2024 年 3 月

- 高橋美鈴：余市湾を中心とした「海の歴史」学習プログラムの構築に係る基礎的研究
—「林家文書」からみるヨイチ場所における近世場所請負制度の様相—…… 1
- 三浦泰之：【史料紹介】宮城学院女子大学所蔵の林家文書について …………… 5
- 東俊佑：ヨイチ運上家の年中行事と仕事暦—文政13年(1830)の暦を例として—…… 13
- 高橋美鈴：【資料紹介】大川遺跡斗内沢地区から出土資料について…………… 23
- 中塚風沙：企画展「左川ちか BLUES」の企画と今後の課題…………… 29
- 令和5年度博物館活動報告 …………… 34

余市水産博物館

余市水産博物館 研究報告

第 18 号 2024 年 3 月

余市水産博物館

余市湾を中心とした「海の歴史」学習プログラムの構築に係る基礎的研究 —「林家文書」からみるヨイチ場所における近世場所請負制度の様相—

高橋 美鈴
余市町教育委員会

1. はじめに

本稿は、令和5年4月1日から令和6年3月31日まで実施した『余市湾を中心とした「海の歴史」学習プログラムの構築に係る基礎的研究—「林家文書」からみるヨイチ場所における近世場所請負制度の様相—』における事業報告である。

また、各分担者による報告は同誌に個別で掲載している。

2. 目的

余市町は、北海道の西部、積丹半島の東の付け根に位置し、町の北側は日本海に面し、他の三方はゆるやかな丘陵地に囲まれた町であり、先史時代より自然の恵みを楽しみ、交易の中継地点として栄えてきた。その歴史は、多くの埋蔵文化財から明らかになっている。また、近世においては、ニシン漁によって発展し、町の基礎を築いた。

また、余市湾は天然の良港として知られ、特に、近世から明治期にかけて、北前船の寄港地としてニシン粕を輸出し、瀬戸内における綿花栽培や藍栽培、煙草栽培等の日本列島の発展に寄与した。

とりわけ、近世から明治期にこれらの物流交易の中継地として機能した「旧下ヨイチ運上家」は、近世北海道の場所請負制度を担った場所請負人が管理する交易所及び役所の機能を有し道内の各「場所」に設置された施設のひとつで、現存する建物としてはこの「旧下ヨイチ運上家」が唯一である。

この「旧下ヨイチ運上家」の場所請負人・林長左衛門が残した「林家文書」は、運上家の運営や漁場での生活を知る重要な資料であり、余市町における海運やニシン漁の様相や歴史を伝える貴重な資料である。

しかし、当資料は、その数が膨大であることや資料の散逸により資料の所有施設が複数あり、資料の全容が明らかになっておらず、調査研究及び利活用が困難であり、横断的な資料調査及び目録の作成が急務となっている。

このことから、「林家文書」の横断的かつ体系的な調査を行い、その中から町の歴史に関する事柄を抜き出し、それらについて調査研究を進める。そして、当時の余市湾における物流交易の様相を明らかにし、海を中心とした町の発展や過去の話となりつつあるニシン漁が町の発展に寄与した歴史を再整理する。

併せて、研究の成果を基礎資料とし、小中学生を対象とした「海の歴史」学習プログラムを構築する。

3. 事業概要

(1) 事業名

余市湾を中心とした「海の歴史」学習プログラムの構築に係る基礎的研究
—「林家文書」からみるヨイチ場所における近世場所請負制度の様相—

(2) 事業実施期間

令和5年4月1日～令和6年3月31日

(3) 分担者

- ・三浦泰之（北海道博物館・学芸主幹）
- ・東 俊佑（北海道博物館・学芸主査）

4. 調査概要

(1) 余市町所蔵史料調査

日程：令和5年12月25日～12月27日

場所：余市水産博物館

内容：余市水産博物館所蔵史料のうち仮目録Ⅳの一部及び新規寄贈林家所蔵写真についての調査を実施した。

(2) 宮城学院女子大学所蔵史料調査

日程：令和5年10月26日～10月28日

場所：宮城学院女子大学

内容：宮城学院女子大学では、全17点の史料について調査を実施した。

5. 史料概要

5-1 余市水産博物館所蔵史料

余市水産博物館（余市町教育委員会）では、「林家文書」約1,900点（一括含む）を所蔵している。

一部資料は、これまでに町内団体である林家文書解読ボランティアの会（林家文書解読ボランティアの会：2009, 2011, 2013, 2015, 2017, 2021）や余市町史資料編1（余市町総務課余市町史編纂室：1985）で翻刻がなされている。

資料は、松前町年寄関係や松前の林店関係、ヨイテ場所関係など多岐にわたる。そのため、本事業での調査は、町の歴史に関する事柄及び学習プログラムに利用する海に関連する部分のみを抽出した。

5-2 宮城学院女子大学所蔵史料

宮城学院女子大学所蔵史料についての詳細は、分担者である三浦泰之氏の報告による。

本事業では、絵図など当時の町の様子がわかる資料を抽出し、学習プログラムに用いた。

6. 学習プログラム

これらの研究成果を基に、小学校向けの学習プログラムのテーマについて時代別に大きく4つの内容を分け、「海の歴史」トランクキットを用いた学習プログラム（案）を検討した。学習プログラムは以下のとおりである。

【テーマ】

①【江戸時代】ヨイテ場所の頃の余市（林家文書からみる海の歴史）

小テーマ：運上家とは？～運上家の1年～

対象：3、4年生

目的：「林家文書」の内容や絵図から学習する。

内容：①江戸時代の余市町の絵図を見てみよう
～【宮17】と現在の地図の比較

②ヨイテ場所って？

③運上家は何をしているところ？

②【明治～昭和】ニシンと漁場

小テーマ：昔のニシン漁って？

対象：3、4年生

目的：明治から昭和の漁場の仕事や生活について学習する。

内容：①ニシン漁場ってどんなところ？

②ニシン粕はどうやって作るの？

③ニシン粕はどこに運ばれるの？

③【令和】今はどんな漁業？

小テーマ：どんな漁業をしているの？

対象：3～5年生

目的：牡蠣の養殖事業など近年の新しい漁業や過去から続く海と町の発展について考える。

内容：①新たな試み-牡蠣の養殖

②今に続く漁業-戻ってきたニシン

④【未来の漁業】私たちができること（環境問題）

小テーマ：町の発展に寄与した海の恵みを後世に残すために、自分たちがすべきことについて考える。

対象：1～3年生

目的：町の発展に寄与した海の恵みを後世まで継続するために自分たちがすべきことについて考える。

内容：①海のゴミって？

②どこから来るの？

③私たちにできることは？

謝辞

本事業にあたり、宮城学院女子大学 高橋陽一准教授には史料調査をご快諾いただきましたことお礼申し上げます。

また、余市町立黒川小学校校長村秀之校長には学習プログラム作成にあたり、ご助言いただきました。

なお、本事業は、船の科学館「海の学びミュージアム」の支援を受けて実施いたしました。

参考文献

林家文書解読ボランティアの会

2009『林家文書解読と研究』1

2011『林家文書解読と研究』2

2013『林家文書解読と研究』3

2015『林家文書解読と研究』4

2017『林家文書解読と研究』5

2021『林家文書解読と研究』6

余市町総務課余市町史編纂室

1985『余市町史資料編』1

「海の歴史」学習プログラム(案)

①【江戸時代】ヨイチ場所の頃の余市（林家文書からみる海の歴史）

小テーマ：運上家とは？～運上家の1年～
 対象：3、4年生
 目的：「林家文書」の内容や絵図から学習する。
 内容：①江戸時代の余市町の絵図を見てみよう
 ～[宮17]と現在の地図の比較
 ②ヨイチ場所って？
 ③運上家は何をしているところ？

ねらい

- 江戸時代の余市や北前船交易について学び、余市の海の歴史を学ぶ



旧下ヨイチ運上家

②【明治～昭和】ニシンと漁場

小テーマ：昔のニシン漁って？
 対象：3、4年生
 目的：明治から昭和の漁場の仕事や生活について学習する。
 内容：①ニシン漁場ってどんなところ？
 ②ニシン粕はどうやって作るの？
 ③ニシン粕はどこに運ばれるの？

ねらい

- 明治～昭和にかけてのニシン漁で活気付いていた余市の歴史を学ぶ



旧余市福原漁場

③【令和】今はどんな漁業？

小テーマ：どんな漁業をしているの？
 対象：3～5年生
 目的：牡蠣の養殖事業など近年の新しい漁業や過去から続く海と町の発展について考える。
 内容：①新たな試み - 牡蠣の養殖
 ②今に続く漁業 - 戻ってきたニシン

ねらい

- ニシンの漁獲高が減少した後の余市の漁業や現在の取り組みについて学ぶ

④【未来の漁業】私たちができること（環境問題）

小テーマ：持続可能な漁業のために
 対象：1～3年生
 目的：町の発展に寄与した海の恵みを後世に残すために、自分たちがすべきことについて考える。
 内容：①海のゴミって？
 ②どこから来るの？
 ③私たちにできることは？

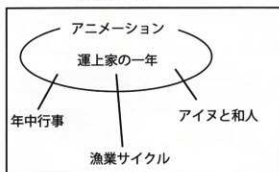
ねらい

- 漁業関係者の声や環境問題を学び、自分たちが大人になった時の余市の漁業について考える。

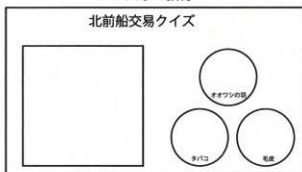
「海の歴史」学習補助教材（案）

①【江戸時代】ヨイチ場所の頃の余市（林家文書からみる海の歴史）

視聴覚教材



ハンズオン教材



②【明治～昭和】ニシンと漁場

視聴覚教材



ハンズオン教材



③【令和】今はどんな漁業？

視聴覚教材

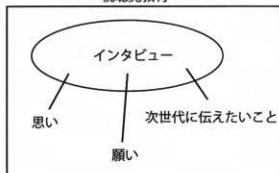


ハンズオン教材

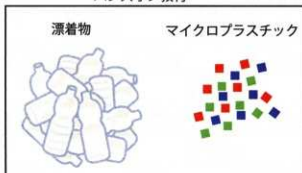


④【未来の漁業】私たちができること（環境問題）

視聴覚教材



ハンズオン教材



史料紹介

宮城学院女子大学所蔵の林家文書 について

三浦泰之（北海道博物館）

はじめに

近世後期にヨイチ場所請負人を務めた林家は、現在の秋田県にかほ市象潟の出身で、屋号は竹屋、家印は「ヤマ上（ヤマジョウ）」、当主は代々、長左衛門を名乗っている。象潟では廻船問屋を営んだが、文化元年（1804）頃に松前へ渡り、商店を構えた。そして、東蝦夷地アブタ場所やアツケシ場所の請負に関わった後、文政8年（1825）から西蝦夷地ヨイチ場所の請負人となった。

ヨイチ場所は、現在の後志管内余市郡余市町を中心とする一帯である。幕末、例えば、文久元年（1861）では、運上金額は565両余、人口は、運上家の番人・稼方が63人（男51、女12）、永住和人が40軒170人（男86、女84）、出稼ぎ和人が76軒1093人（男879、女214）、アイヌが84軒454人（男240、女214）であった¹。近世後期に盛んになった和入地からの鯨漁出稼ぎの影響による和入人口の増加という西蝦夷地口場所から中場所にかけての一般的な傾向を示すとともに、その中で比較的、アイヌ人口が多い場所でもあった。

この林家に伝来した古文書群がいわゆる「林家文書」である。近世後期の北海道史やアイヌ史を対象とした研究の中で活用され²、質量ともに優れた古文書群として知られている。

ただ、その一方で、いまだにその全体像が把握

されるには至っていないことも事実である。その要因として、「林家文書」が現在、複数の機関等に分散して保存されているという点が指摘出来る。その主な機関や資料の概数を列挙すると、

- ・余市水産博物館（約2000件）
- ・北海道博物館（1142件+17件）
- ・北海道立図書館（約700件）
- ・札幌市中央図書館（約90件）
- ・小樽市総合博物館（約60件）
- ・神奈川大学常民文化研究所（19件）
- ・宮城学院女子大学（17件）
- ・北海道大学附属図書館（1件）

となる³。資料画像をデジタルアーカイブで公開している機関もあるなど、資料情報にアクセスする環境が整いつつあるものの、どの機関にどのような性格の文書が保管されているのか、全体像を把握することは難しく、機関横断的な林家文書全体の目録の作成が望まれるところである。

本稿ではそれに向けた作業の一環として、宮城学院女子大学所蔵の林家文書について紹介する。

資料の概要

宮城学院女子大学所蔵の林家文書は、20年以上前に同大学の人間文化学科が古書店から購入した古文書群で、表1の通り、全部で17件ある。

内容的な特徴は、大きく3つに分けられる。

まずは、「①ヨイチ場所及び林家余市店関係」である。ヨイチ場所請負人時代のものとしては絵図面2冊（No.17・16）のみで、後は、明治10年代を中心とした余市での漁業経営に係る「永歳謀用留」1冊（No.5）、松前から余市に拠点を移した明治10年代以降の商店経営に係る帳簿5冊がある。次に、「②林家松前店関係」である。文化元年頃から明治10年代まで商店を経営し生活面での拠点でもあった松前にて作成された記録類である。主に、3代目長左衛門（1823～1882）と、西蝦夷地スツツ場所請負人福島屋田付家から養子に入り、

¹ 余市町所蔵（余市水産博物館保管）林家文書『与市御場所諸書上』（Ⅲ-124-1～Ⅲ-124-3）

² 林家文書が活用されている研究成果の概要は、北海道開拓記念館一括資料目録第38集『林家資料目録』（北海道開拓記念館、2009年）68～69頁を参照のこと。なお、北海道開拓記念館は、現在の北海道博物館のことである。ちなみに、北海道博物館所蔵資料の概数を1142件+17件としたのは、前掲『林家資料目録』掲載分1142件に加えて、その後、別の経緯で収蔵された文書が17件あることを示している。後者については、上田哲司「余市・林長左衛門家の三等郵便電信局関係資料の目録と解題」（『北海道博物館研究紀要』第7号、2022年）を参照のこと。

³ 現在、公的機関に保存されている林家文書については、前掲『林家文書目録』67～68頁を参照のこと。なお、後述するデジタルアーカイブに関しては、北海道立図書館ウェブサイト「北方資料デジタルライブラリー」、札幌市中央図書館ウェブサイト「デジタルライブラリー」がある。また、北海道博物館ウェブサイトにある「収蔵資料検索」でも前掲『林家文書目録』に掲載されている一部の文書について資料画像が公開されている。

元治元年(1864)11月に家督を継いだ4代目長左衛門(1839~1886)の手になるものが中心である。

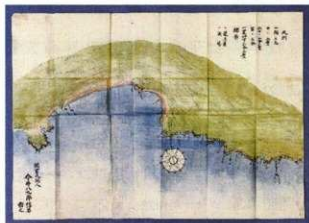
最後に、「③松前町年寄関係」である。3代目長左衛門は、松前藩(館藩)より、明治3年(1870)7月26日に松前の町政を掌る「町年寄」を拝命し、同年末まで務めた。その勤務中にまとめた備忘録的な冊子1冊がある。

本稿では、上記の17件の内、表1の①No.16の「西蝦夷地ヨイチ亀絵図面」について取り上げる。

本図は、縦最大79.5cm、横最大88.5cmに貼り継がれた和紙に墨書されたヨイチ場所の絵図面で、場所内の字名、各字に所在した施設名、他場所と往来するための交通路などの情報が盛り込まれている。作成年代は明記されていないが、「字ヌウチ沢」に「ウス善光寺末庵地所」という区画が記されている点が注目される。ヨイチ場所に、蝦夷三官寺の一つ、ウス善光寺の末庵が建立されることが決まり、地所の割り渡しが行われたのは安政5年(1858)で、庫裏の建立は翌年春、本堂開利は文久元年(1861)であった。ここから、本図は、地所割渡の直後、安政5年(1858)から翌年頃の作成ではないかと考えられる。図中には、例えば、「此船大工/小ヤ/宿ヤ/書入不用」、「馬ヤ/此辺へ/御書入可被下候」のように、修正指示と思われる付箋が貼り込まれているなど、未完成の下図と思われるが、これほど大判の絵図面は林家文書の中にはほぼ類例がなく、幕末期のヨイチ場所の全体像を知り得る貴重な史料と言える。

宮城学院女子大学所蔵の林家文書の調査及び写真撮影は、船の科学館「海の学び ミュージアムサポート」事業として、令和5年度に余市水産博物館が実施した調査研究「余市湾を中心とした「海の歴史」学習プログラムの構築に係る基礎的研究—「林家文書」からみるヨイチ場所における近世場所請負制度の様相—」の一環として、高橋美鈴(余市町教育委員会)、東俊佑・三浦泰之(北海道博物館)の3名で行った。

調査に際しては、同大学の高橋陽一氏、および菊池勇夫氏にお世話いただいた。末尾ながら、記して、感謝申し上げる。



No. 17 【ヨイチ場所図】



No. 1 永代日記 一番 明治二己巳正月



No. 6 日記 明治十四年辛巳四月十三日ヨリ



No. 10 代胸簿 巻番 文久三年戊九月日

■表1 宮城学院女子大学所蔵 林家文書目録

①ヨイチ場所請負及び林家余市店關係

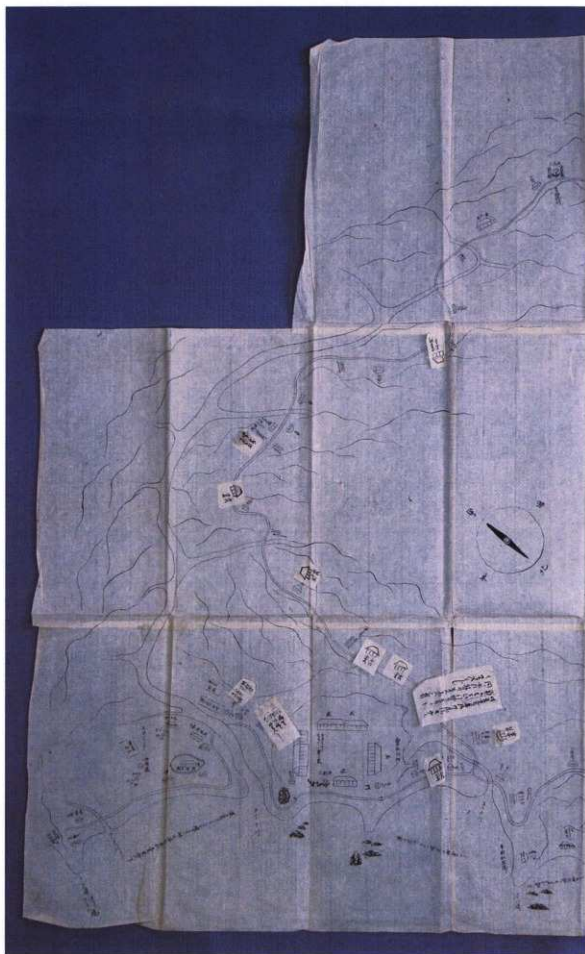
No	史料名	作成年月日	数量	形態	法量		丁数	作成者・差出	(一)宛先・備考
					縦	横			
17	ヨイチ場所図		1	繪	39.0	54.5		間宮氏間人今井八郎信名因之	「凡例として「一間二毛ノ十々二厘ノ六十々一分二厘ノ百々二分ノ一厘四寸三分二厘ノ幅」と墨書あり
16	西蝦夷地ヨイチ魚絵図面		1	繪	79.5	88.5			短書き「西蝦夷地ヨイチ魚絵図面」
5	永藏譜用留 明治九子年	明治9年～19年	1	冊	16.6	12.2	97	林朝志 ※4代目林長左衛門	各書家での出産高など、表紙に「第巻号」と朱書あり
8	万鉄細工通 明治廿三年第七月吉日	明治23年7月～明治24年7月	1	冊	横半紙	12.4	17.0	20(墨付11)	★(カネ沢)[印][印文に「後志国余市郡」★(カネ澤)殿治屋。→★(ヤマ福)御印様
11	本藩諸島仕入簿 明治廿五年歳八月起	明治25年8月～明治26年1月	1	冊	横半紙	15.0	22.0	69(墨付60)	★(ヤマ上)支庫(沢町3番地)
12	懸帳 明治卅五年第八月吉日	明治35年8月～明治36年11月	1	冊	横半紙	11.3	16.2	91	★(ヤマ上)竹屋林商店
13	懸帳 明治卅六年第十一月改	明治36年11月～明治38年6月	1	冊	横半紙	11.7	17.0	4.5cm	★(ヤマ上)林商店[]係近藤 下部欠損あり

②林家松前店關係

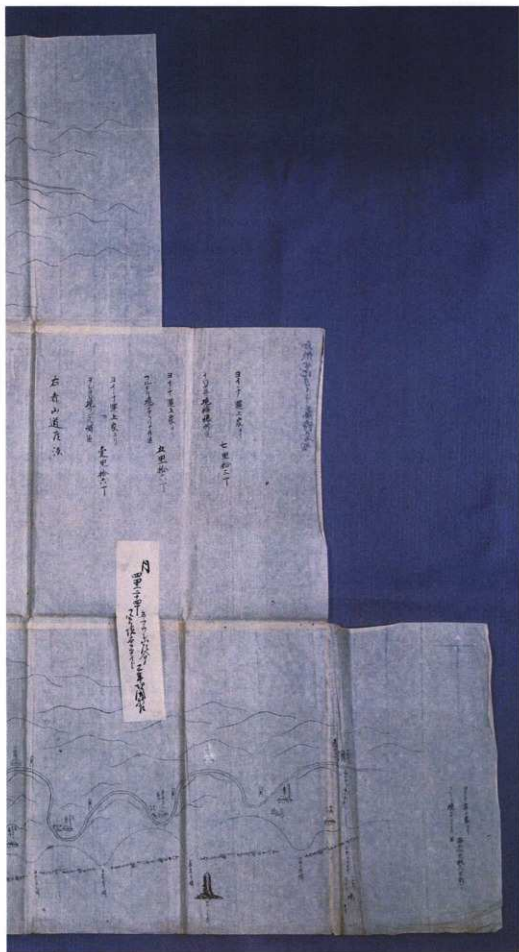
No	史料名	作成年月日	数量	形態	法量		丁数	作成者・差出	(一)宛先・備考	
					縦	横				
1	永代日記写 一番 明治二己巳年正月	慶応4年閏4月～明治9年2月	1	冊	縦紙	24.7	17.2	142	林氏 ※3代目林長左衛門(源左衛門)	慶応4年閏4月以降の繪書や、場所請負人仲間による願書や船状、ヨイチ場所請負関係書類、松前城下での信用関係書類などの写し。冒頭に「為心得之相成候々見聞亦者吉因書類先年ヨリ書渡日記いたし居候処、慶応四戊辰年五月十二日返火之節焼失付、此度日記全焼付、年号并故書之儀前後相成候得共諸事問合之上日記いたし候ニ付如此」とあり
4	二番永代帳 明治九丙子年二月吉日ヨリ	明治9年2月～明治11年8月	1	冊	縦紙	25.0	17.5	47(墨付15)	竹屋性 ※3代目林長左衛門(源左衛門)	
7	店譜用帳写 明治十四辛巳年第一月	明治14年1月	1	冊	縦紙	25.0	17.5	62	(3代目林長左衛門(源左衛門))	松前での年中行事や江戸期の文獻の抜粋など
6	日記 明治十四年辛巳第四月十三日ヨリ	明治14年4月13日～6月25日	1	冊	横半紙	12.2	17.7	40(墨付36)	(3代目林長左衛門(源左衛門))	松前での日記
10	代胸簿 老書 文久武成戊戌九月日	文久2年9月～元治元年11月	1	冊	横半紙	12.3	17.4	30(墨付23)	田附朝清 ※後の4代目林長左衛門	スツツ場所産物の取引値段、ヨイチ場所の運上金額、家督相続後の御礼願り先など
9	日嘉栄 元治元年甲子五月	元治元年5月～7月	1	冊	横半紙	9.8	17.1	16(墨付11)	林朝志 ※4代目林長左衛門	海産物などの取引値段、表紙に「老書」と朱書あり
3	産物直取扣 明治四年未四月	明治4年4月～12月	1	冊	横半紙	10.1	18.2	86(墨付48)	朝志 ※4代目林長左衛門	「奥地立直取」、「ヨイチ★(ヤマ上)売付」、「アタルナ井高相揚六月十五日ニ取極り左ニ」ほか、海産物などの取引値段
14	〔書簡〕(長三郎殿金見羅参詣の件、箱館屋船清通丸昆布積入の件ほか)	(近世後期)8月7日	1	冊	縦紙	24.5	16.2	14	岡兵吉、長治郎	→★(ヤマ上)御印様竹屋性彦左衛門様・御家内衆中殿、長三郎殿金見羅参詣の件、箱館屋船清通丸昆布積入の件ほか
15	直売買取調子帳 寛四月	寛4月～5月	1	冊	横紙	11.6	31.0	14(墨付3)	★(ヤマ上)	

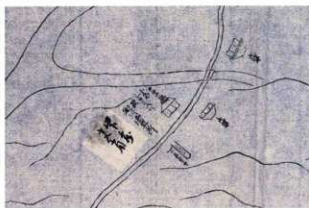
③松前町年寄關係

No	史料名	作成年月日	数量	形態	法量		丁数	作成者・差出	(一)宛先・備考	
					縦	横				
2	勅中譜用 午明治三八月	明治3年8月～閏10月	1	冊	横半紙	12.2	17.0	34(墨付24)	林朝志 ※4代目林長左衛門	4代目長左衛門は、明治3年7月26日から同年未頃まで町年寄を務めた。

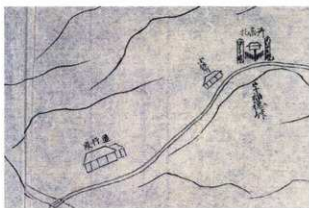


No. 16 西蝦夷地ヨイチ魚輪図

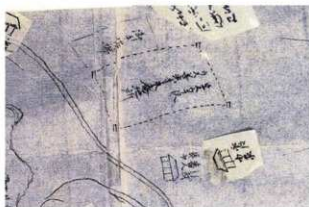




No. 16 拡大「小名シカリヘツ」



No. 16 拡大「宇稻穂峠」 ※ヨイチ領・イワナイ領の境



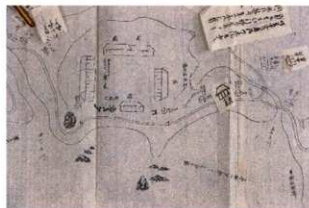
No. 16 拡大「ウス善光寺末庵地所」 ※付箋をめぐった状態



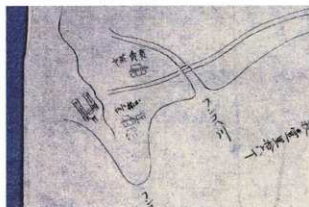
No. 16 拡大「ウス善光寺末庵地所」 ※付箋をめぐらない状態



No. 16 拡大「上ヨイチ」 ※「御役宅三軒」ほか



No. 16 拡大「下ヨイチ/宇モイレ運上家」



No. 16 拡大「フンコへ川」 ※ヨイチ領・ヲシヨロ領の境界



No. 16 拡大「宇チヤラチナ井」 ※ヨイチ領とフルヒラ領の境界



【1】永代日記写 一番 明治二己年正月



【2】動中諸用 午明治三八月



【3】産物直段扣 明治四年未四月



【4】二番永代帳 明治九丙子年二月吉日ヨリ



【5】永歳諸用留 明治九子年



【6】日記 明治十四年辛巳第四月十三日ヨリ



【7】店諸用帳写 明治十四辛巳年第一月



【8】万鉄細工通 明治廿三年七月吉日



【9】日嘉崇 元治元年甲子五月



【10】代胸簿 巻番

文久三年戌九月日



【11】本應諸品仕入簿 明治廿五年辰八月起



【12】懸帳 明治廿五年八月吉日



【13】懸帳 明治廿六年十一月改日



【14】〔書簡〕

(長三郎殿金毘羅参詣の件、
箱館雇船清通丸昆布積入の件ほか)



【15】直売買取調子帳 寅四月

ヨイチ運上家の年中行事と仕事暦 —文政13年(1830)の暦を例として—

東 俊佑

北海道札幌市厚別区小野幌 53-2 (北海道博物館)

はじめに

本稿は、北海道博物館所蔵の林家文書『上下ヨイチ御場所年中日要記』⁽¹⁾をもとに、文政末年～天保初年ごろにおけるヨイチ運上家の年間業務スケジュールを抽出し、ヨイチ場所の年中行事や仕事暦などを検討するものである。

かかる事項については、天保14年(1843)の年記のある『上下ヨイチ御場所年中行事記』⁽²⁾や『安政六己未年御場所見廻り日記』⁽³⁾などを分析した舟山直治や小林真人の研究がある⁽⁴⁾。本稿は、それ以前の年中行事や仕事暦の諸相を探ることで、ヨイチ場所における場所請負制や地域社会の様相、さらには余市町における「海の歴史」を再整理していくための端緒となることを目的とする。

1 ヨイチ運上家の年間業務スケジュール

『上下ヨイチ御場所年中日要記』は、ヨイチ場所における1年間の動きを「正月」から「十二月」まで月ごとに書き記した簿冊(1冊・81丁)である。簿冊の表紙や最末尾に「文政十三年寅十一月改之」とあることから、文政13年(1830=天保元年)11月にそれまでの「日要記」を補訂、あるいは新たに整理して書き留めたものであることがわかる。簿冊の末尾に「右者上下ヨイチ御場所年中取扱等荒増書認置候間、支配人帰郷之節ハ跡役之者江引継申候間、大切ニ相守取計可致者也」とあることから、この簿冊は、作成者であるヨイチ場所支配人が、支配人として取り扱う年間業務の概要をまとめたものであることがわかる。支配人が11月に帰郷のためヨイチを引き揚げるにあたって、ヨイチで越冬する跡役(支配人代を務める者)への業務引き継ぎを目的に作成したものである。

『上下ヨイチ御場所年中日要記』には所々に付箋の挟みこみが見られる。付箋は12枚あり、そのうち6枚に「天保四年」の記載がある。また1枚には「当午年」との記載がある。天保5年(1834)は午年である。このことから、付箋は天保5年ご

ろに付されたと推測できる。したがって、『上下ヨイチ御場所年中日要記』は、少なくとも天保5年ごろまではヨイチで使われたものと考えることができる。

ヨイチ場所請負人、あるいは支配人を務めた竹屋林家は、文政8年(1825)よりヨイチ場所の請負をはじめている。このことから『上下ヨイチ御場所年中日要記』は、竹屋林家の請負初期である文政末年～天保初年ごろにおけるヨイチ場所運上家の年間業務スケジュールが記載されている文書であると言える。

文書の内容については、筆者ほかすでに翻刻済なので、本稿ではそれを元にその内容を表に整理した。巻末の表がそれである。表の「内容」の列は、簿冊の記載内容の意識であり、「分類」及び「名称」の列は「内容」を元に筆者が便宜的に記したものである。

『上下ヨイチ御場所年中日要記』は、「正月」から「十二月」まで、支配人としてその月に指示を出すべきこと・やるべきことがほぼ順番に箇条書きされている。内容は年中行事(仕来や信仰など)に関すること、アイヌや番人などの仕事に関すること、イシカリやヨイチなどの詰合(松前藩の勤番役人)への対応に関すること、追ニシンなど出稼和入への対応などに分類できるが、文書中ではそれらが整序されずに遂行順に羅列、もしくは一つの条文のなかに複数の指示が重層的に記載されている。巻末の表に整理したヨイチ場所支配人の指示内容から、ヨイチ場所の月ごとの動きの概略を抽出すると、次のように整理できる。

1月	年始祝儀(1日)、歳開き(2日)、アイヌ年頭礼(2日)、イシカリ年始御礼(5日)、門松納(7日)、船玉祝(11日)
2月	初午稲荷榊祭礼(初午)、支配人(番番船)のヨイチ到着・着祝、二八追ニシン取到着(御判改・造船免判改)、ニシン漁(5月まで)、大庵合(大漁祝)、初ニシン供物
3月	節句祝儀(節句)、イシカリ下役のシャコタン巡回、医師巡回、水刺舟附船到着、軽物上納、漁業祝、役ニシン納庫の手入など

4月	松前番役人(ヨイチ結合、イシカリ結合など)通行・到着、役ニシン納者馳走、産物備取船到着、番家荷物到来
5月	節句祝儀(節句)、アイヌの出稼道アワビ漁(マシケ・フルウ、7月まで)、河社祭礼(10日)、夷子網づくり、番家始末、追ニシン取引弘、番家引弘
6月	結合御礼(1日)、薪運搬、網修理、帳簿整理、暑中見舞、亀味漁準備(川運上家手入)、ニシン漁準備(柏木皮取、スグレ・トマ・スゲ刈取)
7月	夏オムシャ(7日)、アイヌの亀味出稼(マシケ、9月まで)、亀味漁準備(船籠、早切・カヤ刈取)、越年準備(薪)、ヨイチ結合引弘、オタスツ結合通行
8月	亀味オムシャ、神々様引越(モイレから川へ)、亀味漁(10月まで)、ニシン漁準備(薪、ツナギツラ、網、浮木網、三半船破網)、亀味備取船到着、亀味漁始末(塩漬・塩漬)、秋アワビ突(テタリヒラ起し網アイヌの介抱)
9月	節句祝儀(節句)、カモイ呑、千束祝儀、亀味備入・献上サケ仕立、亀味船手入、カヤ刈取、居小家手入、山取(種伐出)
10月	蔵残り物調査、船定造り、亀味網引弘、飯料取(アイヌの飯料)、ニシン漁準備(浮木、トマ・スグレなど準備、運上家・親々などの煤払)、神々様引越(川からモイレへ)、支配人帰郷・帳簿整理、イシカリへ土産献上、冬準備(水戸手入)、川運上家引弘、カラザケ受取、蛭子講(20日)、網修理
11月	船定、暑中見舞、ニシン漁準備(早切・薪伐出)、夷子網づくり、軽物取
12月	ニシン漁準備、蛭子様年越祝(5日)、大黒尊天様年越祝(9日)、稻荷様・金馬尊様年越祝(10日)、山ノ神様年越祝(12日)、煤払い(21日)、餅つき(25日)、年替御神酒・門松・年男祝儀(28日)、年越・節分(晦日)

2 ヨイチ場所年中行事の諸相

年中行事とは、1年間の同じときにある一定の地域社会のなかで繰り返される行事のことであるが、ここでは前近代日本社会における神々への信仰に関わる行事として検討する。

『上下ヨイチ御場所年中日記』には、「神々様」¹⁾として、「龍神様」「弁財天様(弁天様)」「金比羅様」「稻荷様」「蛭子様」「神明様」「権現様」「仏様」「惣神社様」「大黒尊天様」「山ノ神様」が登場する。「正月」の第2の条文には、毎月御神酒を供える日に関する記載がある(巻末の表には煩雑さを防ぐため記載しなかった)。それによると「神々様」に対し、毎月1日、15日、28日の参日に御神酒を供える指示が出されている。また、毎月3日・8日・27日には「龍神様」、毎月7日には「弁財天様」、毎月10日には「金比羅様」「稻荷様」に供える指示も付記されている。日本古来の神様信仰のヨイチ場所における実践の様子を窺える。

年間の主な年中行事としては、節供など気候の変わり目を祝うものと漁業に関するものに大別できそうである。前者としては、まず3月3日の上巳、5月5日の端午、9月9日の重陽の節供にあたる節

目の日に祝儀を行う様子を確認できる。一方、7月7日の七夕にあたる日は夏オムシャの執行日と定められており、これは漁業に関する祝儀と節供祝儀を兼ねたものと考えることができ、蝦夷地独自の年中行事に姿を変えたものと捉えることが可能である。正月7日人日の記述は見当たらないが、1日の条文中に「但し七草中、御神酒差上可申候事」とあることから、7日までは毎日御神酒を供えていることがわかる。そのほか2月には船荷借仰に基づく初午や、6月1日に月初めの朔日を重視する習俗である氷室祝儀、6月に暑気瘴(暑中見舞)、11月に寒気瘴(寒中見舞)、12月に年越祝、餅つき、煤払い、年男祝儀(門松祝)、節分を行う様子も窺える。これらは日本古来の神様信仰に基づく行事であり、松前以南の日本社会の慣習をヨイチへ持ち込んで実践したものである。

後者の漁業に関するものとしては、1月11日の船玉祝、2月の番船着祝、大寄合(大漁祝)、初ニシン供物、3月の漁業祝、7月7日の夏オムシャ、8月の亀味オムシャ、9月のカモイ呑、千束祝儀、10月20日の蛭子講を確認できる。船玉祝は正月船の仕事はじめての祝儀であり、民俗学では正月2~4日に行う船祝(乗り初め)と11日に行う船玉祝の2種類に大別されるが、11日系の船玉祝は本州の日本海側に多く見られる習俗である⁶⁾。2~3月に行うものはニシン漁に関するものであり、なかでも大寄合(大漁祝)は、二八追ニシン取の出稼和人を含めた漁業関係者をもてなす酒宴としての側面が強い祝儀である。夏オムシャはヨイチアイヌをもてなす祝儀であるが、実施日は7月7日と明記されている。夏オムシャの条文の但し書きに「附タリ、其年柄夏場漁事手配等二付、延日二茂可有是事」とあり、また前条文に「追鮑相備候上者、別紙儀上書之通取計江可申候事」とあることから、6~7月に行う春ニシン漁・秋サケ漁のさまざまな準備や夏漁が終わったところを見計らって行われた祝儀と考えられる。先述のとおり7月7日は節供の日であるため、夏オムシャは漁業の慰労と日本古来の仕来を融合した祝儀として執り行われたのであろう。

8~9月に行う亀味オムシャ、カモイ呑、千束祝儀の3件は、ヨイチアイヌをもてなす秋サケ漁に関する祝儀である。サケ漁開始前(亀味オムシャ)、サケ漁中(カモイ呑)、サケ水揚げ1000束の節目(千束祝儀)にそれぞれ行われたもので

ある。カモイ呑=カムイノミが豊漁を祈るアイヌの儀礼を場所年中行事に組み込んだものとされるのに対し⁶⁾、千束祝儀は神々様に鏡餅を供えるなど日本古来の神様信仰を色濃く反映した祝儀として執行されている。

10月20日に行う蛭子講は、1年の無事を感謝し、豊作や大漁、商売繁盛を祈願する祝儀として行われた日本古来の年中行事である。蛭子講の日に限らず、ヨイチ場所では1月11日の船玉祝、2月の大漁祝の際にも蛭子様の掛幅を掛けてお供えをする様子を確認できる。

そのほか気候の変わり目や漁業とは直接関係のない年中行事として、5月10日の両社祭礼を確認できる。

また、ヨイチ場所独自の年中行事として、8月と10月に神々様の「引越」を行っている。これは秋サケ漁期に合わせて、弁天様、稲荷様、金比羅様などの神々をモイレの運上家(下ヨイチ運上家)からヨイチ川の運上家(上ヨイチ運上家)へ移動させるものである。秋サケ漁場であるヨイチ川の近くに神々を鎮座することにより、豊漁を祈願する信仰を体現したものと言える。

3 松前藩詰合への進物上納と書上提出

松前藩は、文政4年(1821)の松前復讐に際し、嚴重な蝦夷地警備を幕府より命じられ、東蝦夷地に9か所、西蝦夷地に2か所、北蝦夷地に1か所の計12か所に勤番所を設置し、「勤番」「詰合」と呼ばれた藩士を配置する。西蝦夷地ではイシカリとソウヤに勤番所を置き、ヨイチ場所をイシカリ勤番の管轄とした。北海道博物館所蔵の林家文書「此五冊ニ諸書上諸答書」⁷⁾のなかに天保3年(1832)7月27日付けの「御詰合様方江七度御進物金納書上」と題する願書が取録されており、イシカリ勤番の重役上田堤ほか、仮イシカリ下役、徒士、医師、ヲタルナイ(オタルナイ詰)、当御場所(ヨイチ詰)、ヲタスツ(オタスツ詰)、イワナイ(イワナイ詰)の名前が記載されている。このことからイシカリ勤番所は、ヨイチを含むオタルナイ〜イワナイの広範囲をカバーしていたことがわかる。また、この文書の表題から、松前藩の詰合に対し7回の進物上納を行っていたこともわかる。

『上下ヨイチ御場所年中日要記』には、松前藩詰合に対し黒アワビを進物として上納する記事

が、1月5日の年始御礼、2月の番船到着、3月のイシカリ下役巡回、4月のヨイチ詰合到着、イシカリ詰合到着、5月のマシケ追アワビ出稼、6月の暑中見舞、7月のマシケ亀味出稼、8月の亀味積取船到着、10月の支配人帰郷、11月の寒中見舞の計11件見られる。このうち3月のイシカリ下役巡回1件、5月と7月のアイヌのマシケ出稼2件を除外し、4月の詰合到着を1件にまとめると計7件となる。「御詰合様方江七度御進物金納書上」の「七度」とは、蝦夷地各場所請負人の勤番松前藩士に対する定例の進物上納の事例と考えられるので、イシカリ下役巡回やマシケ出稼などヨイチ場所特有の案件を除外すると7回の進物上納となり符合する。

『上下ヨイチ御場所年中日要記』からは、十数冊の書上の作成とイシカリ詰合などへの提出の様子も窺える。書上に関する記事を抽出すると、以下のとおり整理できる。

2月	番船到着時、造船免許持参時、御判帳に記す(6月にまとめてイシカリへ提出)。
3月	医師巡回時に薬を頂戴したアイヌの名前書上(御薬頂戴蝦夷人名前書上)と控書の2冊を作成する。水割弁財船到着時、御判帳に記し、掛りの詰合へ提出する。軽物書上2冊を軽物とともに提出する。
6月	暑中見舞時にイシカリ詰合へ7種類の書上を2冊提出する。運上家漁船書上、二八取御判書上、造船御免判書上、上ヨイチ蝦夷人名前書上、下ヨイチ蝦夷人名前書上、出生蝦夷人名前書上、病死蝦夷人名前書上。
8月	亀味積取船到着後、イシカリ詰合へ5種類の書上を2冊提出する。弁財御判書上、出産物書上、ヲムシヤ書上、帰郷番人書上、越年番人書上。
11月	寒中見舞時にイシカリ詰合へ書上3冊を持参する。亀味積取船書上、材木伐出し願書上、困何物書上。

ヨイチ運上家が公的な書上として作成し提出したのものとしては、17種類を確認できる。イシカリ詰合へ直接提出したものは15種類であり、残り2種類は巡回医師へ提出した書上(御薬頂戴蝦夷人名前書上)と軽物書上である。サンタン交易用のカワソウ・キツネ・テンなど小型獣の毛皮(小皮)をはじめとする軽物は、3月上旬ごろに各勤番所への提出が義務付けられており、また東蝦夷地の各場所より回送された小皮は北蝦夷地勤番が通行の際にイシカリ勤番所で渡す決まりであった⁸⁾。ヨイチの場合は、基本的にイシカリ勤番所への提出であろうが、北蝦夷地勤番が乗船している水割弁財船(北蝦夷地へ向かう船)が調掛した

際、直接帳物とその書上を提出した可能性も考えられる。

そのほか、ヨイチ運上家の帳場や松前店で管理した帳簿として以下のものを確認できる。

4月	御用留帳(通行先触の記載)
6月	蝦夷人共貸附帳、番家諸品残物帳
10月	支配人帰郷の際に松前へ持参する帳面15冊を用意する。金銭留帳、鯖場仕置帳、番人貸附帳、番家々出物控、夏々諸品残物帳、番家々船々造船控、諸品注文帳、土産物帳登控、番家諸品残物帳、仕込物請取控、御帳物書上控、二八役請取帳、御通行御附控、越年帰郷番人調子控、俺味諸仕置帳。

支配人が松前へ持参するために用意する帳面15冊のなかに、御用留帳や蝦夷人共貸附帳は含まれていない。上記のほかにもヨイチ運上家は業務の都合上、運上家備付けのさまざまな帳面を作成していたと考えられるが、「上下ヨイチ御場所年中日要記」からは確認できない。

4 ヨイチ運上家の生業暦

最後にヨイチ運上家の生業暦を「上下ヨイチ御場所年中日要記」の記述から整理しておきたい。ヨイチアイヌの仕事暦については小林真人の詳細な研究があるので、ここではアイヌ・和人を含めた大略の整理に留めたい。

ヨイチ運上家の年間業務スケジュールから生業に関するものを抽出して整理すると、生業は春のニシン漁と秋のサケ漁の2つを柱として回転している様相を読み取れる。ニシン漁は支配人や番船、追ニシン取が到着する2月ごろにはじまり、追ニシン取がヨイチを引き払い、番家を引き扱う5月まで続く。6月と7月は翌年のニシン漁や秋サケ漁の準備期間となる。秋サケ漁は俺味オムシャを行う8月ごろにはじまり、俺味網を引き扱う10月まで続く。残りの10月と11月(年によっては12月まで)は翌年のニシン漁や越冬準備となり、1月は漁業や漁業に関する仕事の記事は見られない。これが運上家の基本的な生業サイクルである。

漁業の要は網であり、なかでも大網の使用は水揚量を大きく左右する。春ニシン漁の主体は出稼ぎとしてヨイチへ来る二八追ニシン取や番人など(運上家・番家)であり、秋サケ漁の主体はヨイチアイヌである。「上下ヨイチ御場所年中日要記」には、ニシン漁とアイヌの関係を示す記事はほと

んど見られず、2月の最後の条文中に「追解取江蝦夷人は迄之通出稼いたし、弘引迄之内、蝦夷人共貸いたし候儀相聞江候ハ、其所之番家方嚴重に可申付事、」とあるのみである。追ニシン取が主導するニシン漁へのアイヌの出稼ぎが存在する一方で、運上家主導のニシン漁場でのアイヌの労働力としての雇用も想定できる。文政5年(1822)の年記のある「上下ヨイチ御場所漁業手配并蝦夷人取扱方日記」⁽⁹⁾には、「蝦夷人漁勘定之儀者、銘々自分商売仕候二付、春漁鮭八束二付造米巻俵、千鰯五束、千鰯八束、鰯四束いづれも同断巻俵宛二買入仕候、夏漁煎海胤数三百五拾同断巻俵、千鰯五百二付同断巻俵宛二買入仕候、」とあり、春のニシン、ホシダラ、ホシガレイ、ヒラメはいずれもアイヌの「自分商売」(自分稼)による漁獲物の運上家による買い取り(和製品などとの交換)であったことがわかる。この記述の示すところは前請負人の柏屋時代のやり方であるが、この史料が竹屋林家ゆかりの文書群(林家文書)中の収録であることから、竹屋時代における柏屋方式の継承を仮定できる。ヨイチアイヌが関わるニシン漁については、運上家などによる雇用労働と「自分商売」の併存を想定できる。

これに対し秋サケ漁は、ヨイチアイヌをもたず俺味オムシャ、カモイ呑、千束祝儀の3件の年中行事が漁期の8~9月に集中して執行されることから、アイヌ主体の漁業であったことがわかる。ヨイチ川には川下に大網、川上に起し網、そのほかヤマウシとテタリヒラにも起し網が設置されている。「上下ヨイチ御場所年中日要記」の8月の条文中に「川上起し網蝦夷人」「大網雇」の文言が見えるので、川上などは網持アイヌの起し網による「自分商売」、川下は運上家の大網による雇用労働でサケ漁が行われたと推定できる。また先述の「上下ヨイチ御場所漁業手配并蝦夷人取扱方日記」には、「秋味漁之儀ハ、其年之高出二応し、右高之内四歩ハ運上家、六歩ハ夷人共荷物二相成候得共、右漁事中被等入用之品調候二付、右漁之高方入用之品々代料を差引仕、其外残り高を以鮭四束二付造米巻俵宛二買上二而、勘定致違候仕来二御座候、」とあり、サケの水揚量の4割を運上家、6割をヨイチアイヌの荷物とする配分状況を読み取れる。ヨイチアイヌの配分となった6割は、入用品の貸付代などを差し引いた残り分がアイヌの取り分となり、それをサケ4束=造

米1俵の交換レートで運上家が買い取る仕組みであったことも読み取れる。これは、いわゆる「自分商売」分の稼高である。このことから、サケ漁についてもニシン漁と同様に、運上家による雇用労働と「自分商売」の併存を想定できる。

ただし、小林真人が指摘するように、ニシン漁、サケ漁の「自分商売」は、大網使用、二八取漁業者の増加、運上家が直営するサケ新網設置の影響を受け、幕末に向かって衰退傾向にあったものと考えられる⁽¹⁰⁾。

なお、運上家が主導する8～10月のサケ漁終了後、川上においてヨイチアイヌの飯料取が行われている。10月の条文に「一、勘定造酒出来込之内、上川江飯料取二蝦夷人不残差登可申付事」とあり、また「一、上川より鮭横米候ハハ、濁酒式盃宛々被下之、一、唐鮭蝦夷人江割合いたし、相預、干上次第二請取之」とあることから、ヨイチアイヌの飯料分のサケ捕獲及びカラザケづくりと、飯料分以外のカラザケの運上家による買取システムの存在が明らかである。

以上を含めヨイチアイヌの仕事暦を『上下ヨイチ御場所年中日要記』の記述から整理すると、以下のとおりとなる。

春 (2～4月)	ニシン漁(雇用)、ニシン・タラ・カレイ・ヒラメ漁(自分商売)
夏 (5～7月)	道アワビ漁(マシケ・フルウ出稼)、ナマコ・アワビ漁(自分商売)、実子網づくり(秋サケ漁準備)、薪運搬(秋・冬用)、網修理、柏木皮取(ニシン場入用)、スグレ・トマ・スダグ取(ニシン場入用)、サケ漁(マシケ出稼、7～9月)、船櫃伐出(秋サケ漁用)、早切・カヤ刈取(秋サケ漁用)
秋 (8～10月)	サケ漁(雇用・自分商売)、アワビ突(テタリヒラのみ)、船の手入れ(秋サケ漁用)、カヤ刈取、居小屋の手入れ(秋サケ漁用)、船櫃伐出(ニシン場入用)、浮木づくり(ニシン場入用)、トマ・スダグ等づくり(ニシン場入用)、網修理
冬 (11～1月)	早切・新伐出(ニシン場入用)、実子網づくり(秋サケ漁用)、軽物取

『上下ヨイチ御場所年中日要記』はあくまでもヨイチ運上家の年間業務スケジュールを記したものである。運上家と直接関わりのないアイヌの仕事暦は文中にはあらわれない。例えば、春・夏・秋漁の「自分商売」や冬期の軽物取のことは記述が淡白であり、実態が判然としない。これらも含めたヨイチアイヌの1年間の仕事暦やライフサイクルについては、「林家文書」などの別の史料か

ら記事を集めて復元していく必要がある。

注

- (1) 北海道博物館所蔵の林家資料B8(取蔵番号152902)。東俊佑・三浦泰之・ちゃれんが古文書クラブ「北海道博物館所蔵の林家資料(一)―林家請負初期関係資料―」(『北海道博物館研究紀要』第7号、2022年)において翻刻され、資料全丁の画像は同館ウェブサイトの「取蔵資料検索」において公開されている。
- (2) 『上下ヨイチ御場所年中行事記』は、余市町総務課余市町史編集室編『余市町史 第1巻・資料編1』(余市町、1985年)において翻刻されている。「I・33」の番号が付されている。「余市町史」に先行して、余市町史編さん室編『ヨイチ運上家ヲムシヤ取扱・年中行事記(余市町史資料叢書第4輯)』(余市町史編さん室、1974年)においても翻刻されている。
- (3) 『安政六己未年御場所見廻り日記』は、余市町史編さん室編『ヨイチ御場所見廻り日記(安政6年)』(余市町史資料叢書第3輯)『余市町史編さん室、1973年)において翻刻されている。余市町教育委員会所蔵の林家文書では「II・12」の整理番号が付されている。
- (4) 舟山直治「林家文書に見られる年中行事」(『北海道開拓記念館調査報告』第25号、1986年)、同「続林家文書に見られる年中行事」(『北海道開拓記念館調査報告』第26号、1987年)、小林真人「場所請負制下の余市アイヌの生活と社会―文政から幕末期を中心として」(『横丹半島の自然と歴史―人文編(北海道開拓記念館研究報告 第13号)』北海道開拓記念館、1993年)。
- (5) 小野重朗「正月と盆」(富田登吾代表「日本民俗文化大系 第9巻:巻と祭事=日本人の季節感覚」小学館、1984年、pp.139-140)。
- (6) 谷本晃久「近世蝦夷地在地社会の研究」(山川出版社、2020年)のp.397参照。
- (7) 北海道博物館所蔵の林家資料B71(取蔵番号153935)。東俊佑・三浦泰之・ちゃれんが古文書クラブ「北海道博物館所蔵の林家資料(二)―ヨイチ場所の書上―」(『北海道博物館研究紀要』第8号、2023年)において翻刻され、資料全丁の画像は同館ウェブサイトの「取蔵資料検索」において公開されている。
- (8) 拙稿「北蝦夷地ウシヨロ場所アイヌの軽物上納」(『北海道博物館研究紀要』第6号、2021年、pp.37-38)。
- (9) 北海道博物館所蔵の林家資料B3(取蔵番号152901)。前掲(1)「北海道博物館所蔵の林家資料(一)」において翻刻され、資料全丁の画像は同館ウェブサイトの「取蔵資料検索」において公開されている。
- (10) 前掲(4)小林1993のp.24及びp.27による。

日	分類	名称	内容
1月			
1日	年中行事	年頭祝詞	○朝4時、ユウカにおいて越年番人が互いにご祝詞をする。オショロ場所へ年始番人を派遣する。
1日	年中行事	年始祝儀	○夕方、越年頭役が年始祝儀を行う。ご祝儀として清酒1樽を支給する。ただし七草中は御神酒を差し上げる。
2日	年中行事	嵐頭等祝儀	○清事取初め、嵐頭などご祝儀を行う(※定書6か条を読み上げる)。
2日	諸対応	アイヌ年頭礼	○昼頃「年頭之礼」に来た乙名・小使へ対応する。 ・乙名・小使全員へ清酒4升を支給する。 ・セツご祝儀として片割餅を支給する(取物類上の取物類にて)。 ・カズノコをのせた皿を贈る。 ・引物として切餅5枚ずつを支給する。 ・オショロからの年頭礼者には清酒1樽を支給する。
正月 3日間	仕事 注意事項	休日	○1月1日～3日の3日間、番人は休日とする。 ・若年の者は出稽するまで酒を決して飲ませない。 ・飯炊きの者は16日まで休日はなし。
5日	諸対応	イシカリ表年始御礼	○イシカリ表(の松前藩関係者)へ年始御礼を行う。番人を前日のうちに派遣する。 ・遺物：黒アヅビ(重役：300、徒士250、医師250、下役250、オダツブ船合200、元小家200)。 ・遺物はアイヌ人足により運ぶ。毎船の様に1人につき酒2盃、米1升を与える。翌日は休息をとらせる。ただし車代は無代。
7日	年中行事	門松納	○門松は残らず納める。
11日	年中行事	船玉祝	○船玉祝として清酒1樽を支給する。各番家を廻り、賑やかにご祝儀を行う。 ○ユウカへ船子様の掛物を掛ける(掛物の左右に番家の船印を飾り、中央に御神酒1、左右に餅を供える。右餅は両ニシン1束、左餅はサケ2尺)。 ・料理と酒を支給し、賑やかに祝儀を行う(餅2つ、飯(白)、平(黒アヅビ、のしコンブ、豆腐)、汁(かまぼこ、みそ)、皿(カズノコ))。 ・乙名・小使へは祝儀として清酒2升、酒(濁酒か?)2升を支給する。 ・(番家)8か所の船頭へ清酒2升、濁酒(2升か?)を支給する。ただし1盃ずつの貸し付けもある。
15日	年中行事		○御神酒として清酒1樽を支給する。
16日	仕事		○運上家飯炊は休日とし、初めて下ってきた(ヨイチへ来た)番人に手伝いを命じる。ただし番家に回っていたならば、適宜呼び出して命じる。
2月			
初午	年中行事	初午稲荷敬祭礼	○稲荷様に小豆飯を差し上げる。 ・御神酒として清酒1樽(2斗入)を支給する。
この月	諸対応	普祝	○松前城より支配人が下ってきたら、乙名・小使へ祝詞として清酒1升に濁酒2升を添えて支給する。
この月	諸対応	番船到着届	○イシカリ表へ番船到着届の届けとして、支配人を派遣する。 ・(松前藩関係者へ)遺物：アイヌ人足の取り扱いは年始御礼と同じ。
この月	諸対応	書上提出	○二八造ニシン取の船がヨイチへ入庫したら、「御判」を厳しく改め、御判帳に書き違いのないように記し、6月中に監所(イシカリ勘定所)へ書上を提出する。
この月	諸対応	書上提出	○造船免許判参考書がいたら、「御判」を厳しく改め、御判帳に書き違いのないように記し、6月中旬に監所(イシカリ勘定所)へ書上を提出する。造船完成時は寸尺を改め、出帆の際に江差沖の口役所へ番人を派遣し、書付を送る。
この月	年中行事	大寄合(大漁祝)	○道ニシン取の者が入津し、賑ったら、日柄をみて大寄合を開き、法度を申し渡す。また大漁の祝いとして馳走を行う。 ・真中普座敷の床間に船子様の掛物を掛ける。掛物に御神酒と御饌米、右に餅(両ニシン1束)、左に重(赤飯)を供える。 ・清酒の樽(2斗入)を支給し、たくさんの酒肴で賑やかにご祝儀を行う。赤飯は1盃ずつ一阿へ支給する。
この月	年中行事	初ニシン供物	○初ニシンが賑がったら、神明様へ供物をし、すべての神々様に御神酒を差し上げる。
この月	仕事事項		○道ニシン取の者が無断で山に入るなどをし、木高などを伐り出したら厳重に処罰する。大寄合の際にこのことを申し渡す。
この月	注意事項		○道ニシン取へのアイヌの出稼ぎは、これまでのとおり認める。彼らが引き払うまでの間に、アイヌに対し妄らな行為があった場合はその所の番家より厳しく対処する。
3月			
節句	年中行事	節句祝儀	○赤飯をつくり、すべての神々様に御神酒を差し上げる。ただし、扱名主方へ(赤飯を)1重ずつ支給する。
この月	諸対応	イシカリ下役巡回	○イシカリ下役様のシャコタン巡回があるので、前日に庶民への手入れを行う。遺物としてアヅビ200を納入する。
この月	諸対応	医師巡回書上提出	○医師のシマコキまでの巡回があるので、病気のアイヌがいた場合は、薬を置いて介抱をする。薬を預取した者の名簿書と共々に2冊作成する。
この月	諸対応	水戸舟舳船到着御判帳提出	○水戸舟舳船が下ってきたら、御判などを指図する。調出した船にはその日から昼夜とも番を付け、指示があれば万事対応する。「御判」を改め、帳面に記し、掛りの船合帳へ遺物を添えて送る。
この月	諸対応	軽物上納	○(前日当てられた)軽物を不足なく揃え上納する。その際、軽物書上2冊(イシカリ提出用と松前提出用)を提出する。
この月	年中行事	漁業納	○漁場所へ漁業祝として清酒1樽を支給する。
この月	仕事	ニシン漁関係	○役ニシン納束の手入れをし、かつ自分の足をもって身欠結立のよつを命じ、支障がないようにする。 ・ただしアヅビなども見許りを命じる。 ・竹針300本ぐらいを用意する。 ・漁業の様子を見て上納用カズノコについて広く指示を出す。
4月			
この月	仕事	松前藩役人連行準備	○通行前日に普請などを行い、取り扱いはなどを大切に心得て、支障がないようにする。 ・陣子紙5束5枚、行灯紙18枚を用意し、張替えの準備をする。 ・登替えを行う。
この月	諸対応	役ニシン納者馳走	○帳面に(納めた漁獲ニシンを)調べて受け取ったあと、馳走をする。 ・酒肴として三品を馳走し、清酒を支給する。 ・大酒をして運上家に対し我儘を働いた者は、今回は馳走を行わない。 ・勝手口酒を持ち込まない。

日	分類	名称	内容
この月	諸対応	通先行触到来	○通先行触が到来したら御用前帳へ記載し、次の通先行先へ様子案内の手紙を送り、手配に支障がないように隣の場所とも相互に連絡を行う。先触は昼夜にかかわらず送る。
この月	諸対応	ヨイチ詰合到着	○ヨイチ詰合が到着したら進物として黒アワビ300、金200円(元は酒1樽。近年は酒の代わりに目録となる)を上納する。 ・酒は在船中に飲むためのものであることをお断りする。 ・アワビに目録を添える。目録には大山西と記す。詰合引き払い時は願書を受ける。
この月	諸対応	インシカリ詰合到着	○インシカリ詰合到着時は、安着監視として支配人が到着を出発させる。 ・その際、黒アワビを上納する(歳役300、徒士250、医係250、下役250(越年につき50増)、オタスツ詰合200ずつ(越年の場合は50増)、オタクナイ・タカシマ詰合200ずつ、家来兼100ずつ、元小家200。 ※詰合到着時に金納にするかの問い合わせる。
この月	諸対応	詰合在勤	○毎朝、三役の者が用向きの有無を確認する。
この月	諸対応 注意事項	詰合在勤	○毎月1日・15日・28日の3回御礼を行う。 ・御礼日には「御返」を差し上げる。 ・酒肴はその時の様子で出す。 ・詰合帳(の簿在中及び)通行時ともに番人一同は飲酒禁止。 ・在勤中は大切に扱う。
この月	諸対応	出産物積取船入岸	○出産物積取船が入岸したら御礼を詰合帳へお見せし、舟附船の船頭を詰合のところへ挨拶に行くようにする。 ・御礼帳に記載し、8月にインシカリへ書上を提出する。 ・舟附船より詰合帳への進物の世話をし、差し上げる。
この月	諸対応	詰合在勤中	○詰合帳が他場所へ巡回する際は番人を付き添わせる。 ・付き添わせる者は飯炊以外の者とする。
この月	諸対応 仕事	番家荷物到来	○各番家より荷物が到来したら、その船へ乗り込んだ(荷物積み下ろしを行った)アイヌへ酒2盃ずつを支給する。
5月			
	節句	年中行事	【節句祝儀】 ○沖々艇へ赤飯と御神酒を供える。 ・葛團、蓬を菓々まで残らず扱う(菓く)。 ・赤飯を両名主(長名主)へ1盃ずつ支給する。 ・朝、詰合帳へ願書を差し上げる。 ・夕方、酒肴にて御飯、御餅(飲物1、料理)を用意し祝儀を行う。
この月	諸対応 仕事	道アワビ	○出稼アイヌのマシケ道アワビ手配は、前日に人別を行い、亀味当所へ出稼など支障なく取り計らう。 ・フルウ場所への道アワビもある。 ・マシケ、フルウの両場所へ派遣する際は、1か所へ番人2名ずつを添えて派遣する。
10日	年中行事	両社祭礼	○人用の品を運上家で取り替えて浜名主方へ渡し、艇やかに修行を行う。
この月	諸対応 仕事	道アワビ	○出稼が残らず引き取ったら休息させる。 ・道アワビは、人別のとおりに派遣し、休息中に支度心をかけさせる。 ・役厚皮取りは、亀味入用の船と同じ割合にして山入りを命じ、支障がないように取り扱う。 ・亀味中に使用の艇も同様に取り扱う。 ・出稼引取時に、人別を改めようえ、酒2盃ずつを支給する。
この月	諸対応	道アワビの届け	○道アワビ派遣は、前日に詰合帳へ届けを出す。
この月	諸対応 仕事	道アワビ	○道アワビへ行くアイヌへ人用品を貸し付ける。また家内御宅へ酒2盃ずつを貸し付ける。 ・(付録)番人持品は、これまでもとり別紙がある。 ・(ヨイチへの)帰郷の際は、荷物を調べ、(アワビなどの)取高を聞いて帳面に記し、勘定の際に間違いないよう心得る。
この月	諸対応	ナマコ・アワビ買入	○ナマコ、アワビの買入は別紙帳簿のとおり、大貝、小貝、川、330につき1個である。他の場所へ行っても間違いないよう取り扱う。
この月	仕事	実子網づくり	○亀味に使う実子網を道アワビ不参加の者へ作らせる。実子網の成立に応じて米や酒酒を与える。
この月	仕事	番家始末	○番家は始末次第に引き払う。引き払いが延びた場合も嚴重に見届ける。
この月	諸対応	道ニシン取引払	○道ニシン引き払い時は、原小家などを夏見届け、もし心得違いの道ニシンがいた場合は、運上家へ届けする。
この月	諸対応	番家引払	○番家引き払い時は、乗り回した三半船を川で手入れし、(来年の)春に支障のないように心がける。
この月	諸対応	番家雇アイヌ	○番家で雇ったアイヌへ、引き払い時に酒2盃を支給する。
6月			
この月	1日 年中行事	詰合御礼	○詰合帳へお礼を申し上げる。 ・朝、沖々艇へ御神酒と干粉を差し上げる。
この月	仕事	新運搬	○秋にたくめの薪を女/子人足(アイヌ女性)をもって、三半船で下げておくようにする。船には番人を添える。
この月	仕事	網修理	○キヨリ網を抽納なくキヨリ(修理)する。
この月	諸対応	帳簿整理	○漁場における「販入共貨別帳」、「番家諸品残物帳」を帳簿へ差し出す。
この月	年中行事	年中見舞	○インシカリ表へ暑気候として支配人に前日に派遣する。進物や書上(7樽帳×2冊)を詰合へ提出する。 ・提出する書上(7樽帳×2冊)：運上家漁船書上、二八取御判書上、造船御判書上、上ヨイチ販入別書上、上ヨイチ販入人別書上、出生販入人書上、病死販入人書上
この月	仕事	スグ刈取	○ニシン場入用のスグをたくさん刈り取る。スグは毎年不足するので、たくさん刈り取り、入念に干し揚げ、嵐に入れ置く。
この月	仕事	亀味漁準備	○亀味船頭役の者に、川運上家の漁票手配をさせる。ただし、「不勝手」のアイヌを大物取り入れないようにする。
この月	仕事	船木皮取	○船木皮取の(アイヌ)女性に離立番人を添えて派遣し、取り揚げを命じる。
この月	仕事	スグレ・トマ・スグ刈取	○春ニシン入用のスグレ、トマ、スグの刈り取りを命じる。対象：ヤマウシより川内川までの沖3か村。
7月			
この月	諸対応	道アワビ	○道アワビの者が帰ったときは、別紙帳簿のとおり取り計らう。
この月	7日 年中行事 諸対応	夏オムシャ	○オムシャ(夏オムシャ)を行う。 ・詳細は別紙のとおり取り扱う。 ・その年の夏漁の手配により開帳が遅れることもある。 ・詰合帳へオムシャご祝儀の御返を差し上げる。酒肴は見付け、吸物・料理の膳で取り扱う。

日	分類	名称	内容
この月	諸対応	マシク雑味出稼	○マシク雑味出稼アイヌの人員を行い、時を見計らって番人2名に支度をさせる。 ・ヨイチ諸合帳へ額を出し、イシカリへ別紙を作成して届け出る(前日に行く)。造物(黒アヅビ)も上納する(度船300、徒200、医師200、下役200、家来兼舟100、当合船300、イシカリ元小家200、タカシマ・オタルナイはなし)。※夏渡アヅビの造物は金納となる(金3朱;重役、金3朱;ヨイチ結合、2朱ずつ;邸医・医師・下役)。天保5年にオタルナイ詣所が設置され、オタルナイ諸合帳に金2朱を差し上げる。秋味出稼(の際の造物)も同様である。ほかにマシク諸合帳には、これまでのとおり夏御堂の際にヨイチにて黒アヅビ200ずつを上納する。 ・別紙の留書を持参し、出帆時に運上家からの留書のほか、ヨイチ諸合帳よりの留書とマシク運上家支配人への御状1封もある。
この月	諸対応	マシク雑味出稼	○出稼が乗船する三平船3艘に仕入品を積み込んで送る。 ・前日に入用品を貸し付ける。 ・家内取替として清酒2箱を貸し付ける。 ・出帆時に人員を改める。 ・出帆後、乙名・小使へ清酒1盃ずつを貸し付ける。 ・三平船1艘につき清酒2斗入り1樽を積み入れる。
この月	仕事	雑味漁業準備	○秋味取替の翌日、アイヌの男性・女性たちを集め、雑味漁業の準備として山入りさせ、船の旗を作らせる(筒船1艘)旗60枚、三平船(2艘)旗30枚、持符船(3艘)旗30枚、縫旗(1艘)2枚。
この月	仕事	雑味漁業準備	○雑味用の早刈、カヤなどをたくさん取らせる。持符船にて早刈をする。
この月	仕事	越年準備	○冬焚用の薪を外側庫へ入れ置く。
この月	諸対応	結合引払	○ヨイチ諸合帳引き払い時、支配人がオショロまで見送りをする。 ・引き払いの前日に取替の御高を差し上げる。 ・残高の品を差し上げる(別紙のとおり)。
この月	諸対応 注意事項	オタスツ諸合帳通行	○オタスツ諸合帳のイシカリ出役通行の際は、大切に扱う。
8月			
この月	年中行事	雑味オムシヤ	○日柄を見合わせ、雑味オムシヤを行う。オショロ運上家へアイヌを派遣する(東オムシヤ出陣案内の手紙を送る)。
この月	年中行事	神々神引越	○雑味漁業中、弁天様、稻荷様、金比羅様は川へ引越をする。 ・引越時は、船頭・番人一同が出迎えをし、太鼓などで賑やかに、前日より機を立てる。 ・オムシヤ定例については別紙(※雑味オムシヤ取扱書)のとおり行う。 ・赤飯をつくる(小豆2升・餅米1斗)。 ・御神酒として清酒1樽を番人へ支給する。 ・弁天様は御宮において賑やかに祝儀をする。
この月	諸対応 注意事項	雑味油	○秋味取替立上り時、袋を取り上げる際は、雑魚1匹であってもアイヌたちが勝手に自分で取って隠さないよう運上家で管理し、乙名・小使・雇アイヌたちで割合をもって分配する。
この月	仕事	ニシン漁準備	○時化により大網が引けないときは、薪やツツアツツ(ニシン漁入用品)の準備をさせる。
この月	諸対応	雑味積取船到着	○雑味取替船が到着したと、御高を記し、イシカリ諸合帳ほかへ造物を差し上げる(造物は先述のとおり)。 ・持参する書上(5種類・2冊);弁財御書書上、出庄物書上、ツツアツツ書上、婚嫁書人書上、越年書人書上。 ・(イシカリ)元小家への造物(黒アヅビ200)もこれまでどおり差し上げる。
この月	仕事	ニシン漁準備	○ニシン網、間置網を今月中に仕置く。浮木罾も同置。
この月	諸対応	雑味船酒掛	○雑味船の間置をオショロへ懸けるときは、手紙を送る。
この月	仕事	ニシン漁準備	○雑味中に春ニシン場で使う三平船網を1か所に3房ずつ川運上家にて準備をさせる。
この月	仕事	漁業始末	○雑味中、塩炭、塩硝などまで始末するよう命じる。
この月	仕事	秋アヅビ突	○雑味漁業中、介船としてナタリヒラ起し網のアイヌへ、浮合次御アヅビ(突)をさせる。
9月			
節句	年中行事	節句祝儀	○神々様へ御神酒を差し上げる。雑味漁業中につき御神酒として清酒1樽を支給する。
この月	年中行事	カモイ香	○雑味漁業中、大網起し網のアイヌへカモイ香をさせる。 ・大網屋船頭・船主一同組み合わせ見計らいのうさ酒2斗入り1樽を支給する。 ・ヘカチ、女ノ子へ還立支給する。 ・3か所起し網のアイヌたちへ米1俵、糍3升を添えて支給する。ただし雑味船定めのときに代料を受け取る定めである。 ・川上起し網アイヌたちへは、大網屋の者同様に取り計らうように命じる。 ・船頭船中の者へは、1人につき清酒2盃ずつを貸し付ける。 ・ヘカチ、女ノ子は2人組み合わせて清酒1盃ずつを貸し付ける。
この月	諸対応 注意事項		○雑味漁業中は賑やかに漁をする。宵折の時は適宜清酒や濁酒を支給し、アイヌを出贈させる。
この月	諸対応	雑味介船	○雑味漁業者への介船は、1人につき糍飯1度、米1盃1度、清酒1盃1度3度で扱う。ほかにその日の留書を与えるか、または通常より手当を厚くする。
この月	諸対応	春ニシン場介船	○春ニシン場介船は、先例のとおり取り扱う。
この月	年中行事	千束祝儀	○雑味千束の際は、ご祝儀として番人へ大網起し網アイヌともお祝儀を行う。 ・御高(餅)を供える:大1通(台高7寸、弁財天様)、中1通(台高5寸、稻荷様、龍神様・金比羅様、権現様)、川運上家分小1通(神明様、金比羅様、龍神様、仏様)、モイネ運上家分小1通(神明様、龍神様、金比羅様、仏様)、中1度ずつ(台高5寸、川尻網、ヤマツシ網、ナタリヒラ網、川上網の4か所の神々)。 ・番人一同へ清酒1樽、糍白米1斗5升、小豆2升を支給する。 ・1人につき清酒(数量不明)、濁酒(数量不明)を支給する。 ・ヘカチ、女ノ子1人につき下され物を支給する。貸付は先述のとおりに取り計らう。 ・弁財天様の御高(餅)は翌日大網船頭一同が直載する。 ・御神酒は、弁天寺において撰務たくさんで賑やかに祝儀をする。
この月	諸対応 仕事	雑味積入 献上サケ	○雑味積入時は弁財船へ加船をさせ、(積み入れたら)すぐに弁財船で送る。 ・献上の大網塩味10尺入2箱を仕立てる(袋7部俵で貯える。中間罾で3か所を結び、立罾を付ける)。 ・そのほか別紙のとおり送り物がある。 ・定めのとおり入念に鹽木札を吟味する。
この月	仕事	船の手入	○雑味漁業中の三平船、持符船はその日ごとに入手をする。縫旗を取り、子リハなどまで始末をし、翌朝支障のないようにする。縫旗は大切に扱うよう厳しく命じる。

日	分類	名称	内容
この月	仕事	カヤ舟取	○番家や蔵の手入れを行い、入用のカヤなど押合がなければ女ノ子にたくさんの刈り取りを命じる。 ・川口に押合がなければメウチあたりの刈り取りを命じる。ただし番人を添える。
この月	仕事	居小家手入	○例年のとおり番人とアイヌに上川漁場の居小家の手入れを命じる。雇アイヌを適宜上川漁場に代々登らせる。
この月	諸対応 仕事	マンケ出稼帰郷	○マンケ出稼が帰郷の際は、先例のとおりに「産々鞋ツツヒ」(贈親)を受け取り改めて、小使・小使役の者、すべてのアイヌ職組員に対し、船1艘につき清酒2斗入り1樽ずつを支給する。 ・出稼の者全員の数をもって諸品の改めをしてこれを受け取り、三半船の手入れをし、囲い置く。 ・1人につき清酒2盃ずつを貸し付ける。 ・出稼の者へ休日を命じる。大網屋の者は上川へ登り、出稼ぎの者は代々大網にてカンナイカンにする。
この月	仕事	樺伐出(山取)	○出稼のアイヌの割合をもって春ニシシ場入用の樺取番手を随行させて、山取を命じる。 ・樺は10俵、三半船積200枚、持替船積30枚、樺3俵を伐り出し、商売に支障のないよう手配する。 ・樺は趣味漁場より雇アイヌに番人を添えて、日帰りで伐り出す。
この月	仕事	趣味漁業	○川上起し網を見つらいのうえ取り揚げる。
この月	諸対応 注意事項	オショロ場所	○オショロ場所より木品をヨイチの出で伐り出したいとの願いがあれば、聞き入れる。 ・川上漁業中につき、もし我儘なことがあれば嚴重に取り計らう。
この月	諸対応	オショロ場所	○趣味漁業中、浮合時に番人をオショロ場所網持アイヌの漁業の見届けとして派遣する。 ・取積したツケはすべて受け取り、勘定の際に代料を支払う。ただし、毎年オムシヤの時からの特許貸付がある。
10月			
この月	諸対応	蔵の残り物調査	○蔵の諸品残り物などを調べておく。
この月	諸対応	勘定造酒	○大網引き払い後すぐに勘定造酒を行う。 ・これまでの造米は3斗入り35俵、瓶4斗入り15俵。 ・ただしその年による(増減あり)。瓶はたくさん用意する。
この月	諸対応	趣味網引弘	○3か所の起し網を引き払った、濁酒を2盃ずつ支給する。清酒は1盃ずつ貸し付ける。
この月	諸対応	趣味網引弘	○大網引き払い時、1組合に濁酒2斗入り1樽ずつ支給する。大勢部屋には2樽、ただし清酒2盃ずつを貸し付け、へカチ、女ノ子は清酒1盃ずつを貸し付ける。
この月	諸対応	飯料取	○勘定造酒がきままでの間、アイヌを獲らず上川へ飯料取に行かせる。
この月	諸対応	飯料取	○勘定がきま、その村々順番に取り計らう。たくさんの飯料が確保できるように出積させる。
この月	仕事	浮木づくり	○例年のとおりニシシ場入用の浮木などを差し出すよう一統へ命じる。寅(文政13)年秋は1人につき50枚ずつを命じた。
この月	仕事	ニシシ場入用品	○ニシシ場入用の諸品を例年のとおりに命じる。 ・トマ類、スダレ類・籠手取・ヤンケフ
この月	年中行事	神々様引越	○弁天様、金比羅様、福稻様を川よりモイレへ引越をする。金比羅様・福稻様は弁財天様の御宮へ仮殿。 ・御鏡(餅)大1盃:弁天様 ・御鏡(餅)中1盃ずつ:福稻様、金比羅様、権現様 ・御鏡(餅)小4盃:モイレ運上家、仏様 ・御鏡(餅)小4盃:川運上家。 ・ただし、(趣味漁場)引き払わぬうちに弁財天様(等)の引越を行う。 ・餅白米7升
この月	諸対応	支配人帰郷	○支配人帰郷時は、次のとおり取り計らう。 ・暇乞として越年する者たちへ清酒1樽を支給する。 ・乙名小使たちへ油漬2升を支給する。「後行控へ(者)共」より願いがあれば、1人につき2盃ずつを貸し付ける。
この月	諸対応 仕事	支配人帰郷 帳簿作成	○店表(松前店)へ持参する帳簿を前日に作成し、支配人帰郷の際に持参する。 ・持参する帳簿15冊:金銭諸品帳、薪俸仕簿帳、番人貸附帳、番家々出費物帳、蔵々諸品残物帳、番家々船々造船帳、諸品注文帳、土産物帳控、番家諸品残物帳、仕込物諸取帳、御軽物書上控、二八役諸取帳、御通行御附控、越年帰郷番人調子控、趣味諸仕込帳。 ・千両川(千歳川)までヨイチよりアイヌを連れて行く。帰ってきたら彼らに手当を支払う(※手当額の記載なし)。
この月	諸対応	支配人帰郷 土産上納	○支配人帰郷の際、イシカリへ土産の黒アワビを持参する。 ・重役250、下役家200、下家来米なし、元小家200。
この月	仕事	冬準備	○水戸の手入れをし、冬に手入れをしないようにする。運上家屋根に米がないように手入れをする。
この月	仕事	川運上家引弘	○川運上家引き払い時は、残り物を入念に調べ、樺採や古頼も含め帳面に記し、翌年の商売が効率よく行えるよう心がける。
この月	諸対応	カラザケ受取	○上川よりツケが到着したら、濁酒2盃ずつを支給する。 ・カラザケはアイヌへ配分を決めて届け、平し届け次第受け取り、手当てとして米2盃ずつを支給する。
この月	注意事項		○他の場所より川へ入りたい(ヨイチ川でツケをしたい)との願いがあっても認めない。 ・オショロ網持アイヌからの願いがあっても認めない。
20日	年中行事	蛸子講	○蛸子講を賑やかに祝う。 ・蛸子様掛物に背のツケ2尺と御神酒を差し上げる。 ・御酒には白米、汁、坪、平(ツケのかまぼこ)、皿(ツケの切り身)を配置する。 ・御神酒の清酒1樽を支給する。 ・乙名、小使たちへは清酒1升、濁酒2升を支給する。
この月	仕事	網修理	○キヨリ網(修理網)を油断なく昼夜ともに補修に努めるよう命じる。
この月	仕事	ニシシ場手配保弘	○ニシシ場手配の仕事は、すべて昼夜とも油断なく行う。 ・10日に1日の休息を設け、そのときは運上家、蔵々、網工場の樺採をさせる。
11月			
この月	諸対応	勘定	○勘定を行う。
この月	諸対応 年中行事	寒中見舞	○イシカリへ寒気願として前日に(人)を派遣し、進物(黒アワビ)を上納する。 ・重役300、徒士250、医師250、下役250、オタツ語合200ずつ、家来米100ずつ、元小家200、米のち金納に家来。 ・人足のアイヌは、年頭と同様に役アイヌを連れて行く。 ・11月は勘定があるので、人足の者は急いで前日に勘定を済ませる。 ・書上3冊を持参する:趣味積入船書上、材木伐出し願書上、問荷物書上。

日	分類	名称	内容
この月	御対応 仕事	早切・薪伐出	○勘定前日に例年のおりニシン場入用の早切、薪及び運上家で使用する薪木について、アイヌの人間を行い、割合を決めてこれらを差し出す命じる。寅年(文政13年)の定めは次のとおりである。 ・釜がある番家は、30駄の薪木を用意する。もし薪にこの実木が契けない場合には、ニシン漁前にこのほかにも20駄を用意する。 ・早切は1か所(の番家)につき200本ずつを毎年足して早切をする。これにより寅11月は薪木6駄と早切(薪)40本ずつを1人につき伐り出すようにした。伐り出したときにはこれを改めて受け取り、このときは預かりなく代料を渡す定めである。 ・買入値段は別紙に定めがある。厳重に取り計らい、決してみだりに取り扱わないようにする。※天保4年11月に早切30本、薪木5駄の組み合わせとなった。
この月	御対応	伐出手当	○木挽や材木伐出のアイヌへの手当などは、その年の薪木高の割り当て分だけ支払う。
この月	仕事	実子餅づくり	○年行アイヌの勘定使介として雑味入用の実子餅の見計らいに実子餅の肥後・買目改めを派遣する。 ・完成の餅、別紙にあるとおり、米、濁酒など望みの品を与える。
この月	仕事	薪木・早切伐出	○勘定が終わる休息し、かつノミ酒を済ませた者は、割り当てた薪木、早切(の伐り出し)を命じる。 ・山入りのアイヌの人間に応じて割合を決め、山入りさせる。
この月	仕事	ニシン場手配 山入	○ニシン場手配を行う人足を命じたら、(山入りの仕事とニシン場手配の仕事)双方の仕事に支障がないように取り計らう。 ・薪木や早切の伐り出しを行わないアイヌたちは運上家へ呼び寄せ、さまざまな仕事をさせる。
この月	御対応 仕事	軽物取	○軽物(取り)は厳重に行うよう命じる。
12月			
この月	仕事	ニシン場手配	○ニシン場手配は途絶なく行い、終了させる。ただしその年により年内中にニシン場へ(手配人数を)回すこともある。
5日	年中行事	年越祝	○鏡子餅へ御神酒を差し上げる。シトキ(餅)を併せて差し上げる。
9日	年中行事	年越祝	○大風尊天様の年越につき御神酒を差し上げる。
10日	年中行事	年越祝	○稻荷様、金比羅様の年越につき小豆飯を差し上げる。稻荷様へは御看としてサケ1尺も差し上げる。
12日	年中行事	年越祝	○山ノ神様の年越につき、御神酒を差し上げる。
正月	年中行事	年越祝	○正月中はすべての神々様へ御酒(餅)を備える。
21日	仕事 年中行事	煤払	○煤払を行う。煤払いのご祝儀として清酒1樽を支給する。
25日	年中行事	餅つき	○餅つきを行う。 ・餅白米3斗入り3駄、白米3斗入り3駄(つき返し餅)を前日に支度する。
	年中行事	御歳餅	○御歳餅を別紙のとおり間違いない命じる。 ・御神酒1樽を支給する(27日、28日の年越御神酒とも)。 ・餅つきご祝儀として番人一統へ汁粉餅を支給する。
28日	年中行事	年替御神酒	○年替御神酒を差し上げる。
28日	年中行事	門松	○門松を建てる。
	年中行事	年男祝儀	○番人の中から年男を1人選び、神々様などの取り扱いを命じる。ただし年男ご祝儀として半紙2伏、手掛1筋、扇子代として紙200文を支給する。
晦日	年中行事	年越	○年越につき神々様へ昼夜とも御神酒、御灯明を差し上げる。御神酒は清酒1樽。
	年中行事	節分	○節分神々様に御神酒、白豆(黒くなるぐらいに炒って一升研入れたもの)を神明様へ差し上げる。ただし御神酒は清酒3升。
	年中行事	歳暮	○オシロイ運上家へ年末ご祝儀として虎巻5尺を送る。

【資料紹介】大川遺跡斗内沢地区から出土資料について

高橋 美鈴
余市町教育委員会

1. はじめに

大川遺跡は、余市川右岸に形成された標高約5mの大川砂丘上に立地する、縄文時代後・晩期～近世・近代に至る複合遺跡である(図1)。

余市町教育委員会では、平成元(1989)年から余市川河川改修事業や余市橋線街路事業、余市都市計画道路に伴う発掘調査を断続的に実施し、延べ21,926.5㎡に上る面積を調査した。本稿では、平成19(2007)年の調査で大川遺跡斗内沢地区から出土した資料の中から主だったものを抜粋し報告する。

2. 大川遺跡斗内沢地区について

大川遺跡斗内沢地区は、大川遺跡調査区の東端に位置する。個人住宅の移転に伴い余市町教育委員会が調査を実施した。

調査では、墓坑14基、土器集中2箇所、近世の貝塚、ベンガラ集中が検出されている(図3)。

発掘調査の概要は以下の通りである。

調査期間：平成19(2007)年7月11日～8月10日
調査面積：約180㎡



図1 遺跡位置図

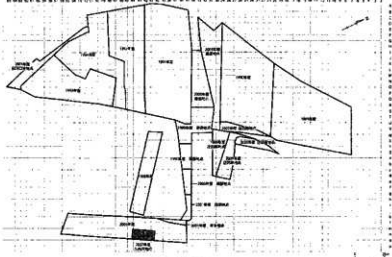


図2 調査位置図

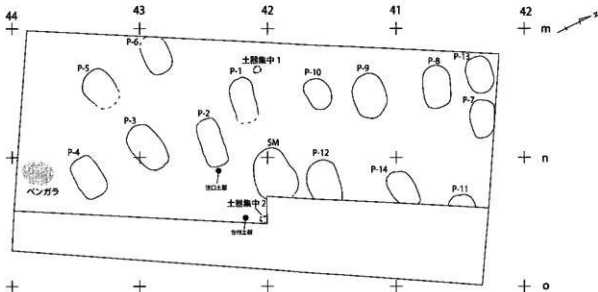


図3 遺構配置図

3. 資料概要

【P-1 出土資料】(図 4-1, 2)

縄文時代晩期に属する墓坑より出土した。

図 4-1 はヒスイ製の玉で、端面は上面が平坦で、下面はやや丸みを持つ。孔は、上面からの片穴穿孔である。図 4-2 は、緑泥石岩製と思われる玉で、端面は平坦で臼状を呈す。孔は両面穿孔である。

【P-2 出土資料】(図 4-3)

墓坑は、覆土及び底面にベンガラ層が、覆土上面には黄色ロームによる封土層が確認された。縄文時代晩期に属すると考えられる。

出土遺物は、土器片及び石斧である。図 4-3 は、藍閃石片岩製の石斧で片刃の刃部を持つ。

このほか、P-2 からは当時の発掘記録より漆弓が 1 点出土したとされる。

【P-3 出土資料】(図 4-4~7)

小石粒子を含む黄色ロームによる封土層を持つ墓坑より出土。出土遺物は、サメの歯、玉、石器などである。図 4-4 は透明感の高い薄茶色の特徴を持つ黒曜石製の石鏃である。肉眼観察だが置戸所山やケショマップ産の黒曜石に類似する。有茎で整った平行刺突が並び、先端部は右側に折れ面、左側縁には槌状の刺突が見える。

図 4-5~7 は玉で、5、6 は緑泥石岩製と思われる。7 はヒスイ製で端面は上面が平坦で下面が丸みを持ち、側面は楕状を呈する。片側穿孔である。

【P-4 出土資料】(図 4-8)

黄色ロームによる封土層を持つ墓坑より出土。口唇部は刻みを施し、4 箇所帯状の粘土帯を貼り付け香炉状の鈎耳部を持つ。頭部は無文で短く大きく屈曲し、胴部上半面に LR の縄文を施し、沈線で区画した後に入組文風の文様とすり消しが施されている。注口は、胴部の最大形よりも上に取り付けられており、短く、貼り付け面に人面の装飾が見られる。また、注口の反対面には中心に刺突がされた注口状の短い貼り付けがなされる。大洞 C₁ 式期に相当すると考えられる。このような香炉形の土器は、1998 年度調査の大川遺跡迂回路地点 P-1 でも出土している(図 6)。

【P-14 出土資料】(図 4-9)

両刃で鏃が明瞭な緑色片岩製の石斧である。遺体層から坑底のベンガラ散布と、覆土上部に黄色ロームの封土が認められた墓坑より出土した。また、当時の発掘記録にはこのほか木製品が 1 点出土したとされる。

【貝塚(SM)出土資料】(図 5-1)

近世~近代のものと思われる貝塚で、ほとんどが攪乱を受けている。貝塚からは、人骨や刀が出土している。図 5-1 は外反りの平棟の刀。棟区、刃区ともに緩く、上身の一部に木質を残す。

【土器集中 2 出土資料】(図 5-2)

土器集中より台付鉢の完形品が出土している(図 5-2)。口唇に刻みを加え、外側に 1 箇所突起が作られている。口縁部に平行沈線を巡らし、台部は無文で縁溝部に平行沈線とそれらを挟むように 2 列の連続した半竹管による刺突列が見られる。大洞 C₂ 式古段階に相当する浜中大曲式¹⁾と思われる。

【包含層出土資料】(図 5-3~8)

図 5-3 は、透かしのある中空の土器で、胴部は中央の沈線で分けられており、下部は筒状で 4 箇所の円形の透かしが外側から開けられている。上部は丸みがあり下部と同じく 4 箇所長楕円形の透かしが外側から開けられている。4 は胴部器形が算盤玉状の注口土器で、P-2 付近から出土した。注口部及び口縁部が欠損している。胴部屈曲部には半竹管による刺突列があり、胴部上半面には一部沈線による文様が、下半面には斜縄文が施されている。縄文時代晩期前葉と考えられる。5 は片刃の緑色片岩製の石斧である。側面と裏面に敲打痕とやや荒い擦痕が見られる。6・7 は黒曜石製の石鏃である。2 点とも薄茶色を呈する透明感の高い黒曜石で、長身細身の特徴がある。6 はカエシ部の左側面及び基部末端、7 は茎部に欠損が見られる。8 は岩層面を持つ厚手の黒曜石製剥片を素材とし、石鏃未製品と考えられる。

謝辞

本地区の調査を担当し、本報告にあたりご助言をくださいました余市水産博物館館長 乾芳宏氏に御礼申し上げます。併せて、本遺跡の発掘に携われた皆様改めて感謝申し上げます。

また、執筆にあたり、芝田直人氏、坂本尚史氏にご協力いただきました。御礼申し上げます。

註 1) 「浜中大曲式」は、余市町大浜中遺跡を標識遺跡とし古崎昌一らによって仮称されていたが、報告書作成前に資料が焼失したため長らく不明であった(古崎:1965)。その後、石狩市シビクス第 4 遺跡で一括資料が出土し、現在はこれが標識として知られている。

参考文献

余市町教育委員会 2000 『大川遺跡』
古崎昌一 1965 「縄文文化の発展と地域性—北海道」『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』河出書房新社

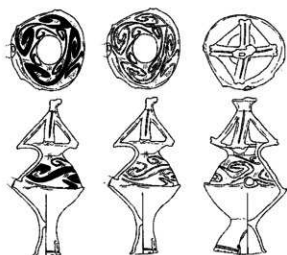


図6 迂回路地点出土香炉形土器(余市町教育委員会 2000)

表1 掲載土器一覧

掲載 番号	図版 番号	遺構名	分類	法量(cm)				その他
				口径	胴径	底径	器高	
図4-8	-	P-4	注口土器	14.0	15.4	8.0	18.0	
図5-2	-	土器集中2	台付鉢形土器	15.4	-	9	11.2	
図5-3	-	-	香炉形土器	5.3	(8.4)	-	-	
図5-4	-	-	注口土器	-	8.5	1.5	(6.4)	

表2 掲載石器一覧

掲載 番号	図版 番号	遺構名	分類	法量(cm)			重量(g)	石材
				長さ	幅	厚さ		
図4-1	図7-1	P-1	玉	1.4	0.6	1	2.6	ヒスイ?
図4-2	図7-2	P-1	玉	1.0	0.4	0.8	1.1	ヒスイ?
図4-3	図7-3	P-2	石斧	10.3	4.7	1.9	112	整閃石片岩
図4-4	図7-4	P-3	石鏃	4.6	2.0	0.5	2.8	黒曜石
図4-5	図7-5	P-3	玉	0.7	0.3	0.5	0.3	緑泥石岩
図4-6	図7-6	P-3	玉	0.8	0.3	0.6	0.3	緑泥石岩
-	図7-7	P-3	玉	0.8	0.6	0.5	-	緑泥石岩
-	図7-8	P-3	玉	(0.7)	(0.4)	0.5	-	緑泥石岩
-	図7-9	P-3	玉	(0.8)	(0.6)	(0.3)	-	緑泥石岩
図4-7	図7-10	P-3	玉	1.8	0.7	1.3	5.7	ヒスイ
図4-9	図7-11	P-14	石斧	6.1	3.8	1.4	46.2	緑色片岩
図5-5	-	-	石斧	8.4	4.3	1.5	82.0	緑色片岩
図5-6	図7-12	-	石鏃	3.9	1.7	0.5	1.6	黒曜石
図5-7	図7-13	-	石鏃	5.3	0.5	1.9	3.1	黒曜石
図5-8	-	-	石鏃未製品	4.4	1.2	2.9	12.8	黒曜石

表3 掲載鉄製品一覧

掲載 番号	図版 番号	遺構名	分類	法量(cm)			重量(g)	その他
				長さ	幅	厚さ		
図5-1	-	SM	刀	(38.9)	(29.7)	1.2	-	

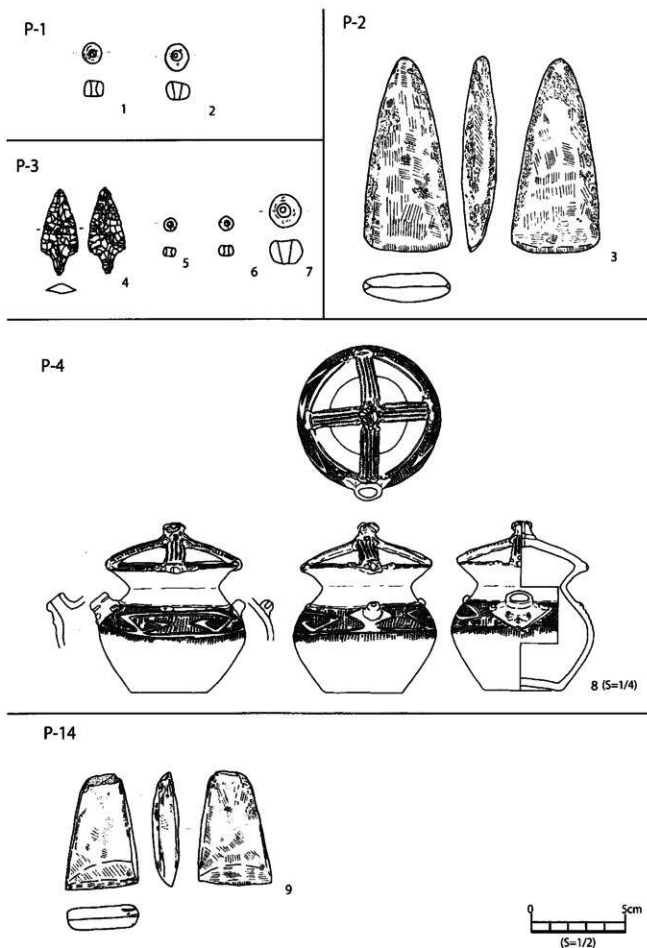
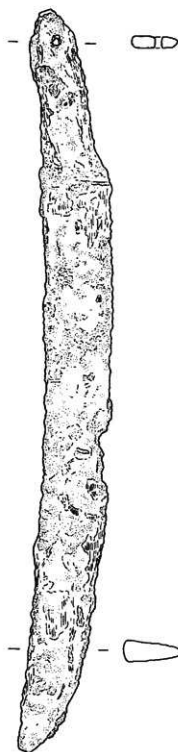
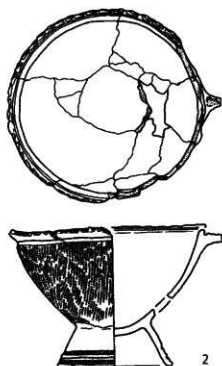


図4 P-1、P-2、P-3、P-4、P-14

貝塚 (SM)



土器集中 2



包含層

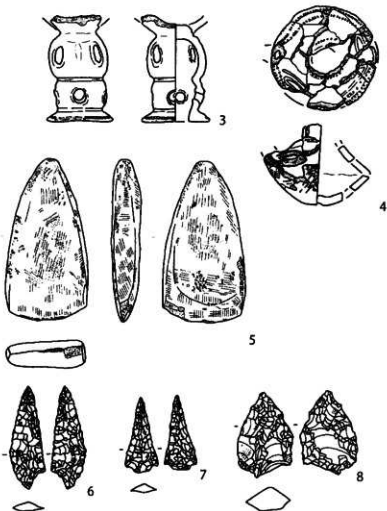


图5 貝塚 (SM)、土器集中 2、包含層



図7 遺物図版

企画展「左川ちか BLUES」の企画と今後の課題

中塚 風沙

北海道余市郡余市町入舟町21（余市水産博物館）

I はじめに

余市水産博物館（以下、「当館」）では、令和5年（2023年）9月16日～12月10日、企画展「左川ちか BLUES」（以下、「左川ちか展」と表記）を開催した。左川ちかは余市町出身の詩人だが、これまで当館で左川ちかを取り上げて紹介したことはなかった。近年、国内外で注目を受ける左川ちかについて、生まれ故郷である余市町で左川ちかの展示を行うタイミングとして適当と考えたことから今回の企画展及び関連事業を企画した。事業実施にあたっては、来館者の多くが、詩は学校の授業でふれたことがある、程度の知識や関心であることが想定された。このことから、展示やワークショップは、日常的に詩にふれる経験の少ない来館者が関心が持てる内容を検討することとした。

本稿は、余市水産博物館研究報告第16号「特別展『土器、大総選挙』の企画と今後の展望」（中塚：2020）と同様に（註1）、展示方法や企画趣旨等についての記録を残すことを目的とする。このことから、事業の企画意図や目標を述べ、これにかかる工夫、来館者及び関係者の反応や意見を記す。

II 左川ちか

左川ちか（さがわちか）は、余市町出身の詩人である。本名は川崎愛（かわさきちか）。明治44（1911）年2月に黒川村大字黒川村字登番外地に生まれ、家族構成は母・兄・妹の4人家族であった。父の顔は生涯知らず、兄妹は皆、父が違った。川崎家の経済事情悪化により、6歳で母たちと別れ、中川郡本別村（現在の本別町）の叔母のもとへ預けられる。その後、12歳で余市に戻り、家族との生活がはじまる。卒業後は庁立小樽高等女学校（現小樽桜陽高校）に入学し、この頃、兄・川崎昇の友人であり、小樽高商（小樽商科大学）に在学中だった伊藤整に出会い、交流を深める。教員免許取得のために進学した小樽高女補習科師範部を17歳で卒業し、上京。先に上京

していた伊藤整や川崎昇を通じて詩人や作家との交流を深めた。18歳で伊藤整や川崎昇らが創刊した『芸芸レビュー』上に、左川千賀の名前で英語文学の翻訳の発表を開始。19歳で最初の詩「青い馬」、「昆虫」を発表し、その後、訳詩や詩の発表を続ける。詩人としてモダニズム詩壇の最前線に立つ姿を、萩原朔太郎は「最近詩壇に於ける女流詩人の一人者で、明星的地位にあつた人」（萩原：1936）（註2）と称した。

しかし、昭和10年（1935年）24歳の夏頃から腹部の疼痛に悩み、10月は胃がんの末期症状と診断。翌昭和11年1月に24歳の若さで亡くなり、この年の11月に伊藤整編集の『左川ちか詩集』が刊行された。

新進気鋭の新人として注目を受けたちかであったが、詩人としての活動は6年間と短く、詩集も決して発行部数が多くなかったことから、「幻の詩人」として、知る人ぞ知る詩人として語られていた。

ちかの詩は、中保佐和子氏の『Mouth: Eats Color - Sagawa Chika Translations, Anti-Translations & Originals』（Roque Factorial Press 2011）など外国語に翻訳出版され、国外で多くの人々を魅了していたが、国内ではながく注目を受けることはなかった。

しかし、令和4年（2022年）島田龍編集『左川ちか全集』の刊行によって、この評価は変わることとなった。本全集は、ちかの発表した詩だけでなく、翻訳、散文、左川ちか研究者である編者によるちかの年譜までが掲載される。この全集が詩集として異例の大ヒットとなり、誰もがちかの作品を手にとることができるようになった。ここから関連書籍の発売、文学雑誌で特集が組まれ、北海道立文学館での特別展が開催となるなど、左川ちかは一気に注目の詩人となった。

Ⅲ 企画展開催経緯とその意図

余市町内における左川ちかに関する調査は、立命館大学人文科学研究員島田龍氏、元余市町史編さん室長盛昭史氏らを中心に、平成30年ごろから実施されていた。

当館では町広報誌で記事(註3)を掲載はしたが、ちかに関する事業を実施したことはなかった。令和4年の全集発売を受けて、翌年度、パネル展という形で博物館で企画展を開催、これに関する事業が実施されることが決定した。また、当館では文学専門の学芸員がいないなかでの実施となったため、島田龍氏、北海道立文学館主任学芸員吉成香織氏、盛昭史氏の指導、協力を得ながらの展示作成、開催となった。

ちか展の展示テーマは「左川ちかを覚える」である。これは「ちかの人となりを知り、ちかの詩を知り、ちかを理解した」という意味での「左川ちかを覚える」ではない。人物を知るうえで、最初の一歩目となる、名前を覚えるだけの展示という意図であった。企画展開催以前、「左川ちか展をやります」と町内でポスターやチラシを配布した際、「左川ちかって何て読むの?」と聞かれることが多かった。ちかがどんな詩を書くのか、どんな人生だったのかを知ることも大切だが、まずは「余市町に生まれた左川ちかという詩人がいた」という事実を知ってもらう必要があると強く感じたエピソードとなった。

上記エピソードと併せて、当館が文学館ではないことから、来館者はちかの名前を知らない状態で展示や事業に参加することが想定された。もちろん、最終的には来館者や参加者には自らちかの詩を手にとって読んでもらいたいという考えはあるが、まずはちかという詩人を覚えてもらうことを目的とした。

Ⅳ 展示・関連事業における工夫

展示は、上記の目標に考慮し、左川ちかを知らない来館者に1つでも印象を残すことを目的とした展示を作成した。また、企画展に関連してミュージアムトーク、映画鑑賞、ワークショップの3つの事業を実施した。

以下に具体例を記し、一部については筆者が実見した来館者の反応についても記す。

(1) 展示の構成

1) 左川ちかの紹介

展示のはじまりは、「左川ちか×余市町の歴史」

というテーマで、郷土の歴史を展示する当館の常設展示と関連した内容とした。展示では、ちかの生涯と余市町の歴史を並べた年表を作成した。これを見ると、ちかの祖父である長左衛門(エ)門が広大な田畑を所有した明治30年代以降から、ちかが亡くなる昭和10年代までに、余市町内では、余市駅の営業開始、ニシン漁獲量の減少、北海道水産試験場完成、竹鶴政孝により大日本果株株式会社(ニッカウキスキー株式会社の前身)が創立された。ちかの詩人としての活動と同じように、この期間の余市町は、その後の歴史に影響を及ぼす出来事が多く、非常に濃厚な期間だったといえるだろう。

本展示では、余市町民にとって身近なキーワード(余市駅、ニシン、水産試験場、ニッカウキスキーなど)を含む余市町の歴史を知り、同じころに余市町で生まれたちかの年譜を併せてみることで、ちかを身近に感じてもらうことを目的として作成した。

また、展示に続けて、ミュージアムトーク「ちかが生まれた余市を学ぶ」を企画した。ミュージアムトーク内では、縄文文化から昭和期のニシン漁まで余市町の一連の歴史を学ぶことができる内容とした。ミュージアムトークは2日間で合計4回総参加者数23名での実施となった。参加者はちかについて関心がある参加者、余市町の歴史に関心がある参加者など知りたい内容が違う参加者が集まった。人数の絞った事業だったこともあり、事業内では盛んに質問や参加者間での交流が生まれた。事業終了後には、ほとんどの参加者が改めて展示をじっくりと見学し、ちかに関心のなかった参加者がちかの書籍を手にとって読んだり、ちかを目的としていた参加者が当館の図録や町史の購入をする様子もみられた。

2) 詩の紹介

展示中盤では、ちかの詩を紹介した。ちかの詩の中から、代表的な詩や余市町に関わるとみられる詩など「青い馬」、「昆虫」、「秋の写真」、「出発」、「錆びたナイフ」、「雪が降ってある」、「青い球体」、「死の聲」、「青い道」、「記憶の海」の10点を選び、掲示した。詩の解説は、小学校高学年から中学生程度で難読と考えられる漢字の読み、単語の説明のみに抑え、詳細な詩の解説は行わなかった。また、イラストやパネルの色合いや詩に登場する生き物の描画などのデザインについては、来館者のイメージを引き出す程度とした(図4)。これは、来館者が詩から受ける印象やテーマをこちらが意図す

るものに誘導せずに、来館者が自由に考えて感じてもらうことを目的としたためである。

筆者が直接、今回の企画展でちかの詩をはじめて読んだ来館者から聞き取りした中で、「何かよくわからないが暗い感じ」、「むずかしい」などネガティブ印象を受けたという意見をよく聞いた。しかし、今回の展示における最大の忌避すべき状況は、何も感じずに見逃して通り過ぎてしまうことと筆者は考えており、少なくともこれらの意見を述べた来館者は、ちかの詩について無関心ではなくなったということである。日常的に詩を読まない人間が詩を読み、自分なりの印象が残ったということは、今回の企画意図である、ちかを覚えることの第一歩につながるのではないだろうか。

この展示でちかの詩の第一印象を得た来館者に、関連書籍を読む、別の詩を読むなど、ちかの詩について考える時間や知る体験にうつつほしいと考えた。そのためには、この展示で得た印象を忘れずに持ち帰ってもらう必要があった。そこで、第一印象を得たお気に入りの詩（展示内では「推詩（おし）」という造語とした）を来館者が持ち帰ることができるよう、「推詩の TAKE OUT」と題して、パネルの下にパネルと同デザインの詩がかかれた名刺大のカード「推詩カード」（図5）を設置した。来館者は、手に取ったカードをスマートフォンケースや財布、定期入れなどに入れていた様子もみられた。このカードについて、館内に設置されているアンケートでは「最初はデザイン重視で選んだが徐々に詩の内容も気に入ったので他の詩も読んでみたくなった」などの意見があった。来館者のなかには、館内図書スペースで選んだ詩が掲載されている書籍を手にとって探す様子もみられた。このほか、北海道立文学館より画像を借用して作成したちかの詩が掲載された雑誌（複写）の展示、ワークショップ「ちかの詩を描こう」で参加者が描いた抽象画（図6）を展示した。

関連事業として、映画会『「外人部隊」を観る』とワークショップ「ちかの詩を描こう」を開催した。映画会では、左川ちかが公開時に観て影響を受けたとされる『外人部隊』（註4）を会期中毎月1回、図書館視聴覚室で上映会を実施した。字幕映画だったことや本展示の見学層の多くにとっては全く聞いたことがない映画だったこともあり、他の事業と比べて参加者は極端に少なかった。今後、同様の事

業を行う場合は、映画とあわせて参加型のワークショップや講座を行うなど、参加者と映画を繋げる工夫が必要だったように思う。

ワークショップでは、最初の30分で学芸員によるちかの解説と参加者にちかの詩を読んでもらった。その後、1時間程度で、アルコールインクを用いて、参加者が詩から受けたインスピレーションを表現した抽象画を描き、乾燥させ、ラミネート加工した。アルコールインクは専用のインクとアルコールをユボ紙に垂らす技法のため非常に簡単に描けるが、慣れるまでは思うように描画できない。参加者は小学校低学年から70代までの男女であったが、アルコールインクによる描画を行ったことのある参加者はおらず、完成作品を並べても作品の巧拙が明確にならなかった印象である。描かれた抽象画は、暗く重い印象のものから、詩から印象を受けた色が使われるもの、詩のキーワードとなる生き物を描いたようにみえるものなどがあつた。参加者からは、「自分で絵を描く目的があつたので詩をじっくりと読み込んだ」などの感想があつた。ワークショップ実施にあつたのは、詩を創作して書くというような事業は行わず、詩を個人で読み込み、詩を書く以外の方法で詩を表現できる内容を目指した。参加者の多くは、ちかの詩を含めて詩を日常的に読まないということだったが、今回の事業内では絵を描くという目的意識をもって詩を読み、詩を別の表現方法で自分なりに形に現すことができた。

3) 余市町出身の歌人、詩人の紹介

展示の最後には、流星北斗や和田徹三など、ちかと同世代の余市町に関わりのある歌人や詩人の紹介を行った。館内図書スペースには、ちかの関連書籍以外に彼らに関わる書籍も手に取りやすいように設置した。また、これに関連して、余市町図書館と連携して図書館内で企画展関連書籍の特設スペースを設置した（図8）。本展示にかかるミュージアムトーク以外の関連事業を図書館で開催したことで、参加者が事業前後に図書館の特設スペースに立ち寄る姿が見受けられ、博物館で得た学びや体験をもとに図書館での自発的な学びに繋がる結果となった。

(2) 内部関係者の勉強会

ちかに関しては、これまでも町内外から問い合わせがあつた。しかし、当館に直接問い合わせがあることよりも、観光協会や図書館、役場に問い合わせがあることが多かった。こうした経緯から、かねて

より博物館職員と関係施設職員で、基礎知識を得られる勉強会や解説資料の作成について協議されていた。そこで、本企画展や関連事業と併せて、余市町観光協会職員や余市町役場職員など、ちかに関する問い合わせを受ける可能性がある職員を対象とした内部向け事業として、「左川ちか勉強会」を実施した。

勉強会前半では、学芸員の解説を受けながら企画展を見学、後半では令和6年度以降に館内や町内関係施設に設置予定のちかに関する小冊子の内容について、様々な立場から意見を交わした。

参加者からは、必要な知識を得ることができる場となっただけでなく、博物館職員や関係施設職員と直接話す機会になったので、今後も意見交換や質問をしやすくなったと意見があった。博物館としても、余市町内でちかを知りたい方を一人でも取りこぼさないために、できるだけ多くの町内施設が連携することは必須であり、また、観光面からの博物館に求められる意見を得る機会となったことは非常に有意義であった。

IV 考察まとめ

これまで当館で行われた多くの展示では、展示テーマに少しでも関心のある来館者を対象として実施したものが多かったが、本事業では展示テーマである左川ちかを知らない来館者を対象とした。

残念ながら、対象者のうちどれだけの人数が左川ちかを覚えたかを知るすべはないが、今回展示や事業を実施したなかで、対象者に特に効果があったと感じたものは、「同じ立場の人間どうしが左川ちかについて話している」状況がつくられた事業である。特に、ミュージアムトーク、推奨カード、ワークショップを実施した際に、学芸員や知識のある来館者ではなく今回対象としているような来館者どうしで話す場が作られたとき、その内容が単純なことであっても、対象者の多くが左川ちかにより強い関心を得ているようにみえた。自分が考えていることを相手に伝えることや、相手の考えを知ることで、自分の記憶や感性に紐づきやすくなったのかもしれない。

今後は、見ず知らずの来館者どうしを繋げる新しい展示手法や、参加者の交流を自然に行うことのできる事業内容の検討、実施を行っていくことを課題としたい。

註1 どのような展示会であったのかを事後に知るためには、「図録」が参照される場合が多い。しかしながら図録は、展示資料については網羅的に掲載しても、前述したような工夫も含めて展示造作などは掲載の対象とはしない場合が多い。従ってそれらについて別の媒体で記録を残しておくことは意義のあることであろう。(中略) 数字だけでは工夫の効果はわからない。個々の展示要素に対する反応を記録し、観覧者の満足度を分析することは、それを推測する手がかりとなると同時に、将来の展示活動の充実に寄与するところが大きいと考えられる。(水島未記・塚繁久『特別展「どんぐりコロコロ」の企画と観覧者の反応」北海道開拓記念館研究紀要 (41) 2013)

註2 「手筒」(萩原明太郎『権の木』34権の木社 1936)

註3 余市町でおこったこんな話「その203 左川ちか」

註4 ジャック・フェデー監督、1933年フランス作品

参考文献

- 浅野敏昭「余市町でおこったこんな話 その203 左川ちか」広報よいち
川村清・島田龍寛責任編集 2023『左川ちかモダンイズム詩の明星』河出書房新社
左川ちか著・伊藤整編 1936『左川ちか詩集』昭森社
左川ちか著・島田龍寛 2022『左川ちか全集』書肆保房
島田龍 2020『左川ちか年譜稿』立命館大学人文科学研究紀要(122) 101-199

謝辞

本企画展開催にあたっては多くの方々にご協力いただいた。島田龍氏には、ちかの年譜や詩の展示において『左川ちか全集』を引用・参考とさせていただくことについて、ご快諾頂いた。吉成香織学芸員をはじめ北海道立文学館の皆さまには展示資料や事業内容の相談やご提案を頂けただけでなくキャプション等についてもご指導いただいた。盛昭史氏、元余市町図書館司書・中村由美子氏には、展示構成及びパネル・資料作成等、企画展及び関連事業開催にあたって、ご指導いただいた。このほか、川崎家の皆さま、小樽市立文学館の皆さまほか多くの方々にご協力いただいた。展示の開催は筆者のみならず、職員全員の力によるものである。この場を借りて感謝申し上げる。



図1 展示状況1



図2 展示状況2



図3 展示状況3



図4 詩の紹介パネル（下部に推詩カード設置）



図5 推詩カード



図6 ワークショップ参加者製作の抽象画



図7 ワークショップでの描画の様子



図8 図書館特設スペース

<年 報>

令和5年度活動報告

1. 施設概要

余市水産博物館・旧下ヨイチ運上家・旧余市福原漁場・フゴッペ洞窟

開館時間 9:00～16:30

休館日 月曜日・祝日の翌日・年末年始・冬期

開館期間 令和5年4月8日～12月10日

2. 運営

(1) 令和5年度職員

教育長 前坂 伸也

教育部長 浅野 敏昭

社会教育課長 中島 豊

社会教育課主幹兼余市水産博物館館長 中村 利美 (4/1～9/30)

社会教育課主幹兼余市水産博物館館長 奥寺 淳 (10/1～3/31)

社会教育課文化財係

係長(学芸員) 高橋 美鈴

主任(学芸員) 中塚 風沙

主事 井上 彩乃

会計年度任用職員(余市水産博物館) 葦本 伸浩・鳥澤 哲子・山下 明子・松井 正光

(運上家) 手塚 真・赤岩 ふみえ・石川 騰

(福原漁場) 片山 豊・小泉 幸司・工藤 京子・菅谷 美樹

(フゴッペ洞窟) 三上 直樹・大森 博子・鎌田 孝彦

(2) 余市町文化財関係施設管理運営委員並びに文化財専門委員

任期: 令和4年4月1日～令和6年3月31日

委員長: 酒井 近義

副委員長: 杵淵 瑞枝

委員: 明村 秀之(専)、高橋 智英(専)、澤野 宗一、伊藤 二郎、玉川 義美

※(専)は余市町文化財関係施設管理運営委員のみ

(3) 令和5年度の主な活動状況

4月8日 博物館・文化財施設令和5年度開館開始

4月22日 小畑弘己氏(熊本大学) 漁網資料調査

5月3日～11月19日 運上家・福原漁場・フゴッペ洞窟ボランティア説明員活動(完全予約制)

6月16日 北海道余市紅志高等学校インターンシップ受け入れ①(高橋・中塚)

6月27日 第3回ニッカウキスキー余市蒸溜所施設保存活用計画 計画策定委員会

7月1日 第55回北海ソーラン祭りに伴う文化財施設無料特別公開

- 7月20日 國木田大氏（北海道大学） 大川遺跡出土資料調査
 7月25日～26日 守屋豊人氏ほか（北海道大学埋蔵文化財センター） 八幡山遺跡出土炭化材サンプリング調査
 8月2日 北海道余市紅志高等学校インターンシップ受け入れ②（高橋）
 8月3日～4日 大塚宜明氏（札幌学院大学） 大川遺跡出土資料調査
 8月18日～26日 札幌国際大学インターンシップ受け入れ（高橋・中塚）
 8月18日 第1回旧下ヨイチ運上家保存活用計画策定委員会
 8月30日～31日 ニッカウキスキー余市蒸溜所施設保存活用計画策定事業及び防災設備事業に係る文化庁調査官現地指導
 9月12日～22日 帯広畜産大学博物館実習生受け入れ（高橋・中塚）
 9月6日～7日 澤井玄氏 大川遺跡・入舟遺跡出土資料調査
 10月12日～11月15日 旧余市福原漁場米味噌倉 棟修理
 10月12日～12月8日 旧今邸園 屋根修理・覆屋設置
 10月17日～18日 第2回旧下ヨイチ運上家保存活用計画策定委員会
 10月24日～25日 旧余市福原漁場防災施設整備改修事業に係る文化庁調査官現地指導
 11月9日 国立アイヌ民族博物館教育長視察
 12月1日 ニッカウキスキー余市蒸溜所施設保存活用計画策定事業に係る文化庁調査官現地指導
 12月4日 清水香氏（明治大学）大川遺跡、入舟遺跡出土漆器サンプリング調査
 12月10日 博物館・文化財施設令和5年度開館終了
 12月19日～21日 旧下ヨイチ運上家 燻蒸作業
 12月30日～1月8日 博物館・運上家・福原漁場・フゴッベ洞窟 年末年始巡回
 2月20日～21日 静岡県静岡市駿河城石垣と遺構表面の保存に関する指導助言（高橋）
 3月9日 北海道大学埋蔵文化財調査センター調査成果報告会（高橋）
 3月11日～12日 「海の学びコーディネーター会議」（高橋）

（4）博物館及び文化財施設利用状況

令和5年度は212日の開館、博物館3,062人、運上家2,971人、福原漁場2,706人、フゴッベ洞窟11,248人の来館者があった。

月別の入館者数は、別表のとおりである。

令和5年度 余市町文化財関係施設入館(入洞)者調

下段の数字は前年度数

施設名	史跡 フゴッペ洞窟		重文 旧下ヨイチ運上家		余市水産博物館		史跡 旧余市福原漁場		総計	
	月別 入洞者数	月別 入洞料	月別 入場者数	月別 入場料	月別 入館者数	月別 入館料	月別 入場者数	月別 入場料	入館者数	入館料
4月	581	160,160	193	45,180	181	35,100	189	52,820	1,144	293,260
	613	157,280	169	36,640	270	39,300	173	43,680	1,225	276,900
5月	1,361	379,340	448	105,640	332	85,380	484	135,560	2,625	705,920
	1,314	355,300	378	85,520	373	85,600	377	95,820	2,442	622,240
6月	1,238	350,360	409	104,880	390	83,840	505	123,460	2,542	662,540
	1,185	336,520	430	86,920	349	58,860	394	108,880	2,358	591,180
7月	1,953	504,380	526	99,280	631	89,640	563	117,100	3,673	810,400
	1,728	475,120	518	126,720	479	97,520	482	129,900	3,207	829,260
8月	2,388	640,100	404	101,700	457	96,640	424	109,400	3,673	949,840
	2,062	561,740	466	111,060	476	89,020	455	106,760	3,459	868,580
9月	1,636	482,820	441	102,780	439	89,460	463	120,640	2,979	795,700
	1,522	417,660	557	126,400	406	90,640	507	136,940	2,992	771,640
10月	1,319	364,320	350	97,300	323	76,860	17	1,600	2,009	540,080
	1,093	308,820	358	87,200	397	82,000	392	95,440	2,240	573,460
11月	655	186,740	163	42,400	227	43,920	22	3,300	1,067	276,380
	538	150,000	138	31,480	144	26,980	109	30,780	929	239,240
12月	117	33,780	21	4,200	82	13,900	23	7,080	243	58,960
	51	16,220	30	5,700	61	7,300	36	9,660	178	38,880
2月	0		16	4,800	0		16	4,800	32	9,600
	0		0		0		0		0	0
計	11,248	3,102,000	2,971	708,160	3,062	616,740	2,706	675,760	19,987	5,102,660
	10,106	2,778,860	3,044	697,640	2,955	577,220	2,925	757,860	19,030	4,811,380

3. 事業活動内容

(1) 寄贈資料受入件数

令和5年4月1日～令和6年3月31日までの受入資料は、庚申講掛軸、手鏡、古写真など計106件であった。

(2) 展示活動

《企画展及び企画展関連事業》

・企画展「地域再発見一沢町展一」

会場 余市水産博物館2階

実施期間 6月1日～8月27日

内容 町内沢町地区の歴史などについてパネルと資料の展示を行った。

関連事業 ①「ぶらっとおさんぽ、沢町地区」

実施日 7月8日

内容 学芸員解説のもと、沢町地区のまち歩きを行った。

・企画展「左川ちかBLUES」

会場 余市水産博物館1階

実施期間 9月16日～12月10日

内容 余市町出身の詩人左川ちかに関する展示を行った。

関連事業 ①映画会「『外人部隊』を観る」

会場 余市町図書館

実施日 9月30日、10月29日、11月26日、12月3日

内 容 映画『外人部隊』の上映会を行った。

②ミュージアムトーク「ちかが生まれた余市を学ぶ」

会 場 余市水産博物館

実施日 11月3日、11月11日

内 容 企画展及び常設展示について学芸員が解説を行った。

③ワークショップ「ちかの詩を描く」

会 場 余市町図書館

実施日 9月24日

内 容 左川ちかの詩をアルコールインクを使って抽象画で描いた。

講 師 景氏 (mAni Design)

※このほか、2月7日、2月13日に余市町役場職員・余市観光協会職員を中心として学芸員による「左川ちか勉強会」を実施。



「地域再発見一沢町展一」実施状況



「左川ちか BLUES」実施状況

《土器じいピックアップ展示》

会 場 余市水産博物館2階

・「むかしの道具〜おとがるもの〜」

実施期間 4月8日〜5月31日

内 容 真空管ラジオや磁石式電話などを展示した。

・「余市神社のお祭り」

実施期間 6月6日〜7月31日

内 容 「北海道後志国余市郡余市稲荷大祭式之図」を展示した。

・「余市のお酒〜十一州〜」

実施期間 8月8日〜9月30日

内 容 樽やラベルなど十一州関連資料を展示した。

・「酒器」

実施期間 10月3日〜12月10日

内 容 徳利やお猪口などを展示した。

《小さな展示》

会 場 余市水産博物館1階

・「スプリングエフェメラル」

実施期間 4月8日～6月30日

内 容 モイレ山でみられる春の植物を紹介した。

・「養蜂のこと」

実施期間 7月1日～9月30日

内 容 ハチや養蜂について紹介した。

・「外から来た植物たち」

実施期間 10月3日～12月10日

内 容 モイレ山や町内で身近にみられる外来植物を紹介した。



「土器じいピックアップ展示」実施状況



「小さな展示」実施状況

(3) 講演・講座・イベント

《来たことない町民、ゼロ計画》

実施期間 開館期間中(4月～12月)の毎月第2土曜・第2日曜日

会 場 余市水産博物館・旧下ヨイチ運上家・旧余市福原漁場・フゴッペ洞窟

内 容 開館期間中の毎月第2土曜・第2日曜日に余市町民を対象に各施設で無料開放した。また、町民の来館者には町民アンケートの記載をお願いした。

参加者数(4～12月) 博物館 117名、運上家 52名、福原漁場 21名、フゴッペ洞窟 28名

《土器じいをさがせ事業》

会 場 余市水産博物館

・「夏休み！トレジャー土器じいをさがせ！」

実施期間 7月21日～8月27日

内 容 参加者は、ヒントをもとに博物館資料が答えとなる「トレジャー土器じいクイズ」に挑戦した。全てのクイズを解いた参加者には景品を配布した。

・「ハロウィン&クリスマス土器じいをさがせ！」

実施期間 (ハロウィン) 10月3日～10月31日

(クリスマス) 11月7日～12月10日

内 容 参加者は、ヒントをもとに博物館資料に隠れているハロウィン(クリスマス)土器じいを探し、全て見つけた参加者に景品を配布した。

《モイレカレッジ》

・「紙紐 de しめ飾りづくり」

会 場 余市町中央公民館
実 施 日 12月9日
内 容 学芸員と正月行事について話しながら、紙紐でしめ飾りを作る。
講 師 高橋美鈴

(4) 館外活動

講師の派遣依頼等を受け、館所蔵資料を使用し町内外での報告会や出前授業等に参加活動した。

①余市町社会福祉協議会「ふるさと余市の再発見 パート6」

講 師 浅野敏昭

期 日 5月30日

開催場所 余市町中央公民館

②北海道余市紅志高等学校2年生国際教養「地域を知る」出前授業（「遺跡と広報からみる余市町史」）

講 師 中塚風沙

期 日 6月2日

開催場所 北海道余市紅志高等学校

③「北海道・東北と樺太におけるアイヌ・人間の北方交易圏の実態研究」成果報告シンポジウム

講 師 浅野敏昭

期 日 6月25日

開催場所 余市町図書館視聴覚室（オンライン・現地）

④沢町小学校6年生総合的な学習の時間出前授業（「アイヌ文化」）

講 師 高橋美鈴

期 日 6月30日

開催場所 余市町立沢町小学校

⑤黒川小学校6年生社会科出前授業（「MISSION！考古博士になれ！」）

講 師 中塚風沙

期 日 7月4日

開催場所 余市町立黒川小学校

⑥黒川小学校3年生社会科出前授業（「余市りんごの歴史にセリフを入れよう！」）

講 師 中塚風沙

期 日 7月4日

開催場所 余市町立黒川小学校

⑦黒川小学校3年生社会科出前授業（「余市町古いたてのマップづくり」）

講 師 小川康和（社会教育係長）・高橋美鈴・中塚風沙

期 日 7月19日

開催場所 余市町立黒川小学校

⑧旭中学校1年生社会科出前授業（「知ろう！見よう！大谷地貝塚」）

講 師 高橋美鈴

期 日 7月21日

開催場所 余市町立旭中学校

⑨「入舟町第2区会夏の交流会」(文化講演「地域再発見 写真でたどる入舟町の今・昔」)

講 師 中塚風沙

期 日 8月4日

開催場所 コミュニティ茶屋 necco

⑩西中学校3年生総合的な学習の時間出前授業(「余市町の将来」)

講 師 高橋美鈴

期 日 8月24日・30日

開催場所 余市水産博物館・フゴッペ洞窟(24日)、沢町地区(30日)

⑪登小学校1～6年生社会科出前授業(「登小学校よいちの歴史教室その1(縄文～アイヌ文化)」)

講 師 中塚風沙

期 日 8月28日

開催場所 余市町立登小学校

⑫令和5年度全道都市立(市町村立)部会秋季研究協議会「地域の教育力を活用した人材づくり」

講 師 浅野敏昭

期 日 8月30日

開催場所 真狩村公民館ホール

⑬登小学校1～6年生社会科出前授業(「登小学校よいちの歴史教室その2(リンゴ・ニシン)」)

講 師 中塚風沙

期 日 9月15日

開催場所 余市町立登小学校

⑭北海道余市紅志高等学校1年生産業社会と人間「地域を知る」出前授業(「寺子屋よいち」)

講 師 中塚風沙

期 日 10月12日

開催場所 北海道余市紅志高等学校

⑮登小学校1～6年生社会科出前授業(「登小学校よいちの歴史教室その3(登小学校指定文化財を作ろう)」)

講 師 中塚風沙

期 日 10月19日

開催場所 余市町立登小学校

⑯連続講座「後志を考える」(「余市町・猪俣家のはなし」)

講 師 浅野敏昭

期 日 10月21日

開催場所 小樽芸術村旧三井銀行小樽支店

⑰沢町小学校3年生総合的な学習の時間出前授業(「沢町小学校・沢町の歴史」)

講 師 高橋美鈴

期 日 11月1日

開催場所 余市町立沢町小学校

⑱沢町小学校6年生総合的な学習の時間出前授業(「余市町・沢町の歴史」)

講 師 高橋美鈴

期 日 11月1日

開催場所 余市町立沢町小学校

⑬余市町女性学級「しめ縄・リースづくり」

講 師 高橋美鈴

期 日 11月27日

開催場所 余市町中央公民館 101・102

⑭沢町小学校6年生社会科出前授業（「むかしのどうぐ」）

講 師 高橋美鈴

期 日 2月8日

開催場所 余市町立沢町小学校

⑮余市町女性学級「歴史探訪講話」

講 師 高橋美鈴

期 日 2月19日

開催場所 余市町中央公民館 301

⑯大川小学校3年生社会科出前授業（「昔の道具いまとむかし」）

講 師 中塚風沙

期 日 2月20日

開催場所 余市町立大川小学校

⑰西中学校2年生総合的な学習の時間出前授業（「キャリア教育・働くことについて」）

講 師 高橋美鈴

期 日 2月29日

開催場所 余市町立西中学校

⑱Yoichi マルシェ vol.9「よいちの日」特別 ver.「余市町の歴史を学ぶオリジナルトートバッグ作り」

講 師 中塚風沙

期 日 3月31日

開催場所 余市駅エルプラザ2階

（5）共催、後援事業

①「古文書教室 in 余市」

実施日 7月4日

会 場 余市町中央公民館

内 容 北海道立文書館と共催で古文書の解読について講座を実施した。

講 師 石川淳氏（北海道立文書館）、浅野敏昭

共 催 北海道立文書館、余市町教育委員会

②ユネスコ世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」登録2周年記念「北の縄文展 2023 6Days in 札幌」

実施期間 7月29日～8月3日

会 場 紀伊国屋札幌本店2階ギャラリー

内 容 北海道の縄文文化の魅力を発信するイベントとして、大川遺跡・安芸遺跡出土資料の展示、

高橋学芸員による縄文ワークショップ「1万年前の地表を再現しよう、サンドアートで芳香・消臭剤づくり」、縄文トークセミナー「縄文って何？教えて！学芸員さん！」を実施した。

- 主 催 北海道
共 催 余市町教育委員会、厚真町教育委員会、千歳市教育委員会、別海町郷土資料館
協 力 根室市教育委員会、北の縄文世界と国宝展実行委員会

③北の縄文展 2024in チ・カ・ホ

実施期間 2月6日～2月7日

会 場 札幌駅前地下広場・北3条交差点広場（西）

内 容 札幌市周辺の縄文遺跡を紹介するイベントとして、大川遺跡・安芸遺跡出土資料の展示、高橋学芸員による展示解説を実施した。

- 主 催 北海道
共 催 北の縄文道民会議
協 力 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター、札幌市埋蔵文化財センター、余市町教育委員会、小樽市教育委員会、江別市教育委員会、厚真町教育委員会

④おうちミュージアム「土器じいからの挑戦状」

令和2年2月より北海道博物館事業として開始。当館は、同年2月よりその趣旨に賛同し、おうちミュージアム「土器じいからの挑戦状」として、余市町ホームページや博物館内のワークシートなどを公開した。

⑤余市町教育委員会社会教育課 SNS 事業

社会教育課（余市町中央公民館・余市町図書館・余市水産博物館及び文化財施設）共同の SNS である、Twitter「土器じいのつぶやき」、Facebook「よいち水産博物館」、YouTube チャンネル「土器じいチャンネル～余市町教育委員会社会教育課～」の更新を行った。

(6) 資料の貸出等

令和5年度の資料貸出等の対応件数は47件であった。内訳は、貸出10件、デジタルデータ貸出29件、閲覧・撮影等8件で、総貸出点数は221点であった。詳細は以下のとおりである。

＜資料貸出＞

- ・北海道立埋蔵文化財センター企画展示「北海道・北東北の縄文遺跡群一すすめ！縄文ワールド」（フゴッペ貝塚遺跡出土 石冠、手形付き土版、足形付き土版など5点）
- ・国立アイヌ民族博物館第7回特別展示「考古学と歴史学からみるアイヌ史展—19世紀までの軌跡—」（大浜中遺跡出土 足金具、兵庫鎖太刀など23点） など

＜デジタルデータ貸出＞

- ・ガイドブック「北の縄文さんぽ」（ドニワ部）—土器じい画像、フゴッペ洞窟刻画画
- ・北海道立文学館特別展「左川ちか 黒衣の明星」—「余市案内」画像、リンゴラベル「林橋 北海食品工業所」画像、古写真「切通しの馬車」画像 など

＜撮影・取材＞

- ・月刊誌「H0」10月号（株式会社ぶらんとマガジン社）—フゴッペ洞窟、西崎山環状列石
- ・ドキュメンタリー短編映画「Sisam—松前三下りを探す」（小川基）—余市水産博物館、旧下ヨイチ運上家 など

4. 調査研究活動

【浅野敏昭（歴史）】

＜調査＞

- ・近世追鯨漁民の移動定着過程について
- ・日本海沿岸における信仰の伝播と定着

＜研究協力＞

文科省科研基盤研究「北海道、東北と樺太におけるアイヌ・和人間の北方交易圏の実態研究」研究代表者北海道教育大学札幌校百瀬響

＜原稿執筆＞

- 「余市町でおこったこんな話」『広報よいち』（毎月）
- 「後志見聞録」『月間小樽學』第169～171号

【高橋美鈴（保存科学・埋蔵文化財・教育普及）】

＜研究協力＞

令和5～8年度科学研究費助成事業 基盤研究(C) 研究課題「境界領域のガラス玉—日本ガラス史構築に向けての基礎的研究—」(領域番号:23K00955) 研究代表者田村朋美

＜原稿執筆＞

2023.4「北海道(統縄文・擦文・オホーツク以降)」『月刊考古学ジャーナル 5月臨時号』(株)ニューサイエンス社

2023.5「玉類の化学分析—ガラス製玉類の流通について—」『別冊季刊考古学』株式会社雄山閣

田村朋美・高橋美鈴 2024.3.31「北大構内から出土したガラス玉の調査」『北大構内の遺跡 30』北海道大学埋蔵文化財調査室

田村朋美・高橋美鈴 2024.3.31「福山城下町遺跡出土ガラス製遺物の自然科学分析」『福山城下町』(公財)北海道埋蔵文化財センター

高橋美鈴・田村朋美 2024.3.31「統縄文文化におけるガラス小玉の流通と変遷」『北海道考古学会(60)』北海道考古学会

＜ポスター発表、口頭発表＞

高橋美鈴・田村朋美 2023.8.11「中近世期の北海道におけるガラス小玉の様相について」東アジア文化遺産国際シンポジウム(ポスター発表)

高橋美鈴・田村朋美 2023.10.21「北海道の統縄文文化期から出土したガラス玉の様相について—北大1式期におけるガラス玉の特徴について—」文化財科学会第40回記念大会(ポスター発表)

高橋美鈴・田村朋美 2024.3.9「北海道におけるガラス玉の変遷と交易」北海道大学埋蔵文化財調査センター調査成果報告会(口頭発表)

【中塚風沙（埋蔵文化財・教育普及）】

＜原稿執筆＞ 北海道立文学館特別展「左川ちか 黒衣の明星」パンフレット

『余市水産博物館研究報告』投稿要綱

『余市水産博物館研究報告』は、余市町に関する研究成果を掲載し、学術・地域・文化の発展に寄与することを目的に発行いたします。原稿を広く募集しますので、本規定に基づき投稿してください。

- 1) 著作権は博物館活動協力会に帰属する。
- 2) 掲載の採否は余市町教育委員会及び余市町水産博物館活動協力会が決定する。余市町教育委員会及び余市町水産博物館活動協力会は、著者に対して内容や句点の修正などを求めることができる。
- 3) 内容の審査の結果、修正が求められた原稿は3ヶ月以内に提出すること。
- 4) 原稿は、論文題目、著者名、所属先、本文の順で記入する。
- 5) 本文末の参考・引用文献は、(佐藤・高橋：2015)、(田中ら：1998)、(鈴木：1999a)のように表記する(同著者、同年の論文が複数ある場合はa,b,c…で区別する)。
- 6) 本文末の「参考・引用文献」欄では、和文の文献を筆頭著者名の50音順に、続いて外国語の文献を筆頭著者名のアルファベット順に並べる。各文献は、著者名、西暦発表年、論文題目、掲載された学術雑誌名、巻、開始ページ終了ページの順で記す。題目は「」で、単行本の書名は『』で囲む。
- 7) 入稿は、文章ならびに図版をプリントアウトした紙媒体のもの1部と図版を含むレイアウト済みのデジタルデータ(Wordデータ)をCD-ROMに格納したものを送付すること。
- 8) 和文と英文の要旨をつけることができる。また、図の説明には英文を併記することができる。
- 9) 本誌に掲載する全ての論文等の著作は、ウェブサイトで一般に公開されることがあるため、投稿にあたってはインターネット上での公開に関しても同意を前提とする。
- 10) 提出原稿の返却はいたしません。
- 11) 1ページA4サイズで天25mm、地・のど・小口20mm、2段組、22字(10.45pt字送り)×45行(15.85pt字送り)とする。
- 12) 文字サイズについては、以下のとおりである。

本文：MS明朝、10pt

タイトル：MS明朝、中央揃え、14pt

氏名：MS明朝、中央揃え、11pt

所属：MS明朝、中央揃え、10pt

小タイトル：MSゴシック、10pt

図・表タイトル：MSゴシック、9pt 引用・参考文献：MS明朝8pt

単位・記号・英数字は半角、一桁は全角

余市水産博物館研究報告 第 18 号

令和6(2024)年3月31日 発行

出版 株式会社 石井印刷

編集 余市水産博物館

発行 余市水産博物館活動協力会

〒046-0011 北海道余市郡余市町入舟町 21

TEL&FAX 0135-22-6187

